○

〔二〇〇〕きりりしやんとして咲く桔梗かな（發句集）

「きりりしやん」といふ言葉は、言葉としては既に陳腐に聞えるが、此處ではよく對象の個性を摑んで居る。

露を含んですつきりと立つ桔梗の花の、あの思ひ切り濃い紫。ハツキリと五つに切れた花瓣。黑ずんだ綠色の堅々とした鋸葉。率直な莖。總てに江戸前の女の面影がある。「きりりしやん」といふ稍々癇立つた語は、實に適切に使はれて居る。

但、この句に於て、「咲く」と說明語を用ゐたことは少し冗漫である。調の上から云つても、きりりしやんとして咲くと、ふいと腰を折られるやうな感じのあるのは、この句のために惜しいと思ふ。

○

〔二〇一〕なでしこや一つ咲いては露のため（七番日記）

腦裡をふい〳〵と掠める片影も、耳底をコソリとゆるがす物音も油斷なく捉へて居るのが一茶である。一茶ほど製作本能の旺盛な、同時にそれを無駄なく使つた人は俳諧史上に一人の比を見ないのである。

一つ積んでは父のため
二つ積んでは母のため……

チリンと鈴を振つて哀れげに謠ふ和讃の調子を借りて、亡者の子供と撫子を引かけたところは、一寸氣のつけないやうな作者の頭の機敏さを思はせる。尤も斯ういふ句ばかり詠まれては、駄洒落滑稽を旨とする古俳諧への後戻りであるが、左樣むつかしく云はずと、作者と共に一寸ほゝゑんで貰へば澤山である。露深い草の中にぽツつりと咲いた撫子の可憐な姿が見えぬでもない。

○

〔二〇二〕草花や行きよい門のいく所（旅日記）

この句も所謂情調俳句の部に屬して居る。初秋の風爽かな宵のそぞろ歩きに、知る知らぬ人の家の門々に、思ひ〳〵に咲く草花のやさしさに誘はれて、見ず知らずの人の家にさへ親しく言葉でもかけて見たいやうな、人懷しい氣分である。

刺すやうな皮肉ばかり云つて居るやうな一茶も、時にはこんなにも親しげに他人に向つてほゝゑみかけて居る。多感な一茶の隠れた一面の語られて居る作である。

○

〔二〇三〕 弟子尼の鬼灯植ゑておきにけり（句帳）

鬼灯と云ふものは、敢て口に嚙む氣はなくとも、其處に一つ轉がつて居るのを見ても、何とはなしに女性の心を惹かされるものである。

弟子尼と云へば先づ少女であらう。無自覺に佛に仕へて居るやうな圓頂黑衣の少女が、本來の女らしさに唆られてした可憐な手すさびを哀れに思ひ遣つた句で、取材には可なり深いものが語られて居る。

然し、坐五は過去分詞で、この句は多分弟子尼の動作を直接見たのではなく、尼寺なぞに鬼灯の植ゑられてあるのを見て作つたものであらう。從つて、發想動機に多分に理智的な感傷氣分が混じて居るために、取材の割合に餘り生々しい感じが迫つて來ない。

○

〔二〇四〕 鬼灯を取つてつぶすや背中の子（句帳）

前句とは全く趣きを異にして、性の區別もないやうな幼兒の暴君振りを叙してある。

紅い鬼灯を一つ點出して、殆んど無技巧に、母親の背中にのけ反つてあばれて居る子供の姿を寫し出して居ることは頗る愉快である。

○

〔二〇五〕 一念佛申すだけ敷く芒かな（おらが春）

前書に「七月七日墓參」とある。さと女が死んで間もなくのことであらう。一茶は常から佛事をよくして、父母や祖母の忌日々々のつとめも缺かさぬ人であつた。

彼の鄕里の小丘小丸山の中腹にある祖先の墓碑の前に、芒折り敷いて靜かに念佛申す一茶の姿は、あらゆる奇智も慾望も超えた一人の純眞な魂の主を想はせる。中七「申すだけ敷く」に、僅に身を置くだけこわ〴〵と芒を踏んで居るやうなつゝましやかな心持も見えて、今までとは全く違つた敬虔な一茶の風貌に接する思ひがする。

〔二〇六〕 名月の御覽の通りくづ家かな（發句集）

人の世を見透すやうな、人の世を小さく見せるやうな、明皎々たる月の照り渡る様を觀じてもらへば恐らく作者も滿足であらう。くづ家は茅屋の謂である。

句意は特に解するまでもない。箱庭のやうに小ぢんまりとした景色が眼前に浮んで來る。然し一茶としては先づ普通の出來ばえであらう。

〔二〇七〕 名月や膳へ這ひよる子があらば（句帳）

幾人目かの子供を失つたあとの膝淋しさ。殊に名月の夜の常よりも幾分飾られた食膳に對して亡き子を思ふ心底は、悲しみと云ふよりももつと澄切つた、どうにもならない人間の孤獨感そのものであらう。云つても云つても言ひ盡きない愚痴を、皎々たる名月に對して他所事に漏した一言は、反つて無量の思ひが籠つて居る。讀過したあとに殘る空洞のやうな寂しさこそ、作者の眞情を語るものであ

らう。

〔二〇八〕 翌の夜の月を請合ふ爺かな（發句集）

木槿などの咲く裏庭に出て、裸で立小便でもやつて居るやうな、頑丈な爺さんを聯想する。

「どうだね、とツつあん。明日の月見は、チツト雲行きがをかしいやうだね。」

「ナーニこの天氣が變るものか。あしたの晩は晴れサ。」

「左様かね。」

「大丈夫だとも。」

天候を相手に些の懸念もなく呑み込み顔に請合つて居る、よくある型の、頑固な正直な人物を活寫し得て居る。

〔二〇九〕 酒つきてしんの座につく月見かな（おらが春）

宵の間は酒に興じて肝心の月見の方はおさんからにしてざわめいて居たのを、いよ〳〵夜も更け酒も盡きて來ると、人々が改めて月見の態度に返つて月を賞美し始めるといふことで、扱つた範圍はよいものであるが、中七が餘り俗ツぽい調子で片付け過ぎてある。

今一層感じを深めて貰ひたいところを、持ち前の諧謔調でポンと放り出される氣味合ひのあるのは、作品を通じて往々見出す作者の癖であるが、斯ういふ句にあつては殊に甚しく味ひを損ねて居る。

一體、一茶は月の句に餘り佳作を殘して居ない。

○

〔二一〇〕深川や蠣殼山の秋の月（發句集）

今も蛤町邊に行けば出逢ふ景であらうが、昔、家も立てこまなかつた頃の、海に近い荒凉たる町の樣を想像に描くと、累々と並ぶ蠣殼山に照る秋の月は、一種の物寂しさを以て觀照される。

この句が平凡な割合に一脈の生命を保つて居る所以は、何と云つても寫生に卽して居る故である。

○

〔二一一〕秋の雨小き角力通りけり（七番日記）

文化七年十月、下總行脚の條に「五鄕內村夕顏觀音に參り角力見物。夜飯田に入る。」といふ記事が見えて、其あとにこの句がある。

秋の雨は淋しいものである。寧ろしみたれたものである。其處へ、旅にある小男の角力取が、ゆかたの袖をしをたれて、ぬかるみのはねでも上げながら寒さうにして行く姿は、物の哀れを極めて居る。實に屢々出逢ふ光景ではあるが、斯うして作品の上に現れて居るのを見ると、今更に、出世のあてもないやうな小角力の身の上まで哀れに思ひ遣らせられる。

いつも〳〵弱き者小さき者の味方である、といふよりも、弱き者小さき者により多く心の交渉を持たずには居られなかつたやうな、作者の境遇から來た特殊な人世觀がにじみ出て居る。

○

〔二一二〕一二三四と薪よむ聲や秋の暮（七番日記）

軒下にでも積込んだ薪を忙しく數へて居る樣であらう。

取立てゝいふほどの句でもないが、上五から中七へかけての詰つた調子に、冬籠の用意に追はれる山家の秋の夕暮の氣分が迫つて居る。「聲や」とあるので、作者自身手を下さず、忙しげな人の動作を見聞して居る情況であるが、それだけ、作者の心を掠める仄な淋しさが餘韻を曳いて居る。

七番日記の中でも終りの方にある句で、故郷に住みついてからの吟である。

○

〔二一三〕をさな子や笑ふにつけて秋の暮（發句集）

「母のなき子の這ひ習ふに」と、前書がある。

私はこの句を見ると、秋の暮方の力ない陽を受けて、草の葉がぺら〳〵と風に吹き返されて居るのでも見て居るやうな、泣くにも泣けない物淋しさを感ずる。

同棲十年目に、生殘つた五人目の子供を殘して妻に先立たれた一茶は、既に六十一歳の齡で乳兒を抱えて途方に暮れなければならなかつた。やがて子供は隣村赤澁の某へ里子に出したが、間もなく死んだのであつた。里親が邪慳でほし殺したといふことで、悲憤悲痛を極めた文章が殘されて居る。この子供が、一茶の生前に抱いた最後の子供であつたのだ。

○

〔二一四〕吉原やさはさりながら秋の暮（七番日記）

吉原が江戸の民衆文化の中心地であり、吉原といふ言葉に江戸人の多くの誇と憧れのつながれ居たことは、今更めかしく語る必要はない。

その吉原も、さりながら秋の暮は淋しいの意で、派手な享樂の地であるだけに、人足のさびれて、茶屋の行燈に秋風の吹くやうな夕は殊に淋しさも際立つことであつたらう。

然しそれ以外に、私解に過ぎるかも知れないが、この中七にはメリヤス物（長唄に屬する小唄）の五大力の「さはさりながら變る色なきおんふぜい」の靜かなメロディが流れて居ると思ふ。取材が取材だけに、場所が場所だけに、作者がそゞろ歩きに小唄のメロディに引つけられて、扨、眼を轉じて廓のさびれた樣をつく〴〵と身にしめる。その間の情緒の動きを味ふと、非常にしんみりとした味が出て來る。

短いものであるから「五大力」の歌詞を全部あげて見る。水調子で聽くべき非常に靜かな曲である。

三下り「いつまで草のいつまでも、なまなかまみえものおもふ。たとへせかれてほどふるとても、えんと時節の末をまつ、なんとしよ。たがひのこゝろうちとけて、うはべはとかぬ五大力。さはさりながら變る色なきおんふぜい、やがてあはふぞへ語ろぞへ、をしき筆とめ候かしく。」

同じ一茶の「霜枯や新吉原も小藪並」よりも、この句の方が情に於て勝れて居る。

○

〔二一五〕近づきの樂書見えて秋の暮（發句集）

「近づき」は、知己の意である。

前書に「八月二十九日善光寺詣。本堂の柱に長崎の舊友たれかれ八月二十八日詣るとしるしてありけるに、今は三十年餘りの昔ならん、おのれ彼地にとゞまりて一つ鍋のもの喰ひて笑ひのゝしりむつまじき人達なり。あはれきのふ參りたらんには、面會してこしかた語りて心なぐさまむものを、互ひに四百餘里の道程へだゝりぬれば、再び此世には逢ひがたき齡にしあれば、しきりに慕しくなつかしくなん。」とある。

句意は前書に盡されて居る。交通の不自由であつた昔のことで、既に傾きかゝる齡を抱いて居た一

茶が、この樂書の前に立つた時の心も遠のくばかりの淋しさ殘念さが思ひ遣られる。時は恰も秋の夕暮である。人間は斯んな場合にほんとうの果敢なさを體感するものであらう。人間生活の一記錄として見捨て難い句である。

○

〔二一六〕淺ましや熟柿をしやぶるていたらく（七番日記）

文化十三年、五十四歳の折の吟であるが、一茶は早くから齒が缺け初めたやうで、もう此頃には一本も殘つて居なかつたらしい。

べろ〳〵の熟柿をべちや〳〵としやぶる齒のない口を聯想させて、實際淺ましい氣がする。これは一茶といふ酵母から醱酵した藝術ではなくて、この句そのものが一茶といふ味噌である。

一茶は俳諧を純粹な藝術として扱ふ場合と、同時に又、生活記錄として何でも彼でも詰込む乞食袋ともして居る。其點、近代文藝の寫實自然主義と幾分相似た傾向を持つて居るとも云はるべきであらう。

○

〔二一七〕うそ寒や蚯蚓の唄も一夜づゝ（發句集）

夜寒、朝寒、うそ寒、肌寒、總て晩秋の季題である。

みゝずはうたはないものであるが、いつか地虫のジーツ、ジーツと鳴くのを、蚯蚓が鳴くと誤り傳へられて了つた。然し誤りは誤りとして、この句の氣分だけはよく分る。

秋も末になつて、そよ吹く風も肌寒を覺える頃ほひ、夜な〳〵庭先に聞く地虫の聲も昨日よりは今日と次第々々に細つて行く、哀れにも心細い晩秋の情趣である。「も一夜づゝ」に、人の心を瞑想に導くやうな餘韻がある。味ふべきである。

○

〔二一八〕のらくらが遊び加減の夜寒かな（おらが春）

素足に突かけた草履に踏む露の冷いやりとして、肌着の垢の身に泌みる宵、貰ひ湯にと出かけた肩の手拭を其儘に、街道に蹤く屋の灯影に吸寄せられて、ツイそれなりうか〳〵と遊び歩いて了ふといふやうな晩秋の情調である。

これは作者が田園に住みついてからの吟であるが、目のあたり村の若衆のこそ〳〵遊びの様を見るにつけても、長い放浪時代の江戸情調も遠く思ひ遣られたらう。此處に使はれた「のらくら」は、ならず者といふやうな意味でなく、兎角稼業に精出すことの出來ない、生意氣盛りといふやうな年頃の若者を指して云つたものであらう。遊び加減といふ多少ふざけた輕い言葉が全體をふつくりと說明して居る。遊びも耽溺でなく、宿場女郎か、村の姉さん達でもからかつて歩くといふ程度の遊びである。

これは飽くまでも客觀句で、自分はもうさうした年齢からは遙に隔つて居るといふ自覺の上に立つ、まあ謂はゞ粹な小父さんの漏した微苦笑である。

○

〔二一九〕小便所こゝと馬よぶ夜寒かな（おらが春）

「戸まどひせし折からに」と、前書がある。

よくあることで、眞暗にして寢ると、夜中にヒョイと起出して如何しても方角を違へて思ふ方へ行けないことがある。素足の足の裏からゾーツと泌みて來るうそ寒さに堪へながら、闇の中に立ち竦んで暫く考へて居ると、シンと寢鎭まつた家の中に廐の馬ばかりが寢醒めて、コツ〳〵と床でも蹴つて

居るか、鼻息でも吐いて居るのが聞える。あゝ彼處が廐だつたナと、やうやく正氣に返つて方角を取戻すのである。

「馬よぶ」といふとぼけた言廻しの中に、幽かな馬の氣配の感ぜられるのも面白い。

○

〔二二〇〕影法師に恥ぢよ夜寒のむだ歩き（おらが春）

「若法師の扇面に」と、前書がある。

この若法師、少しく品行方正でなかつたと見える。腦天に一つチクリと針を刺したやうな句である。然し輕い諧謔調が、互ひに心地よく書き心地よく受けて苦笑したらうと思はれるやうな、作者と若法師との親しさを思はせる。多分入魂な僧侶に戯れに書いてやつたものでがなあらう。

この句の前書は又、若法師を描いてある扇面の意にも取れる。それにしてからが句の味ひに大した變りはない。興に乘つた器用な詠み振りである。

○

〔二二一〕啄木鳥の止めて聞くかよ夕木魚（おらが春）

「グル……グル……」と呟くやうに木の幹を物色して居た啄木鳥の音がぴたりと止んで、あとは木の間に夕の看經の木魚の音ばかりがぽく〳〵と佗しく聞えて居る。「啄木鳥の止めて聞くかよ」は、作者の感情の移入であつて、寧ろ作者自身夕の幽寂境に引入れられて凝と耳を澄して居る清澄な心境が語られて居る。

對象に自分の感情を托する手法は詩に於ては決して珍しいものでないが、たゞ對象に打ち込む魂の深さ淺さに依つて、作の效果に嫌味と眞實性とが分れて來る。この句に於ては、作者が木魚の音に引かれると同時に、今までの啄木鳥の氣配の止んだことにふと氣がついて、「ホウあれも聞いて居るのか」といふ風に、自分の心をそのまゝ啄木鳥の上に働きかけて居る。客觀とか主觀とか分けることの出來ない微妙な俳境である。

○

〔二二二〕田の雁や里の人數はけふも減る（七番日記）

前書に「信濃雪ふり」とある。

寒くなつて、刈跡の田に雁の下りる頃になると、もうそろ〳〵雪を見るやうになる。何れの寒國でも、冬の間男達が稼ぎに出ることは生活上止むない習慣であるが、これもそのことを云つたものであらう。田に集ふ雁と反比例に、日に〳〵人口の減つて行く淋しさを唄つたものである。特に具象化された叙法を執つてないが、そのために反つて、取殘されてこれから長い冬を籠らうとする人の頼りない氣持や、三人五人と旅仕度して別れて行く人の姿なぞも聯想の中に活かされて來る。

前書はあつても無くても解釋に差支へはないと思ふ。

○

〔二二三〕今少し雁を聞くとて蒲團かな（七番日記）

「オイ〳〵起きないか起きないか。もう遲いぜ。」

「ウン……起きるよ。起きるよ。もう少し……もう少し……今、雁の聲を聞いて居るんだ……」

野路か山路を行く旅の朝の情趣でもあらうか——薄れ行く朝霧を破つて、秋の深さを思はせる雁が音が、近く、遙に、途切れ〳〵に聞えて來る。

○

〔二二四〕鵙の聲勘忍袋きれたりな（おらが春）

鵙が啼くと七十五日經つて霜が降ると云はれる位で、澄渡る秋天の下に、高い木のてつぺんに止つて、「キイ〳〵キイ〳〵〳〵」と啼く。思ひ切つてカン高いヒステリカルな音は、「勘忍袋きれたりな」に、動きのとれない適切さを以て現はされて居る。これは地口を洒落に引いたのではなく、他の人が漢語を以て洋語を以て思想を現はさうとするやうな場合にも、一茶は鋭い感覺と奇智とを以て、出來るだけ彼の身邊に近いあらゆる俗言俗語を驅使して居る。これは一茶の強味であり、一茶獨特の妙技と云ふべきである。

○

〔二二五〕寒いぞよ軒の蜩唐がらし（發句集）

こゝにも地方色が出て居る。晝間の程は未だ暑くとも、山邊の氣溫は暮方になると急に冷えて、頭の心まで透るやうな澄切つた空氣の中に、軒近くカナ〳〵が鳴いて居る。カナ〳〵蟬の聲は實際蟲の

音なぞより直接人に迫るものがある。そして、眼に入るものは紅一點の唐がらしの固々と艶を持つた紅は、この場合特に強く作者の注意を捉へて、蜩の音の中に漫然と擴りつゝある哀感をグイと引締めて「寒いぞよ」といふ極めて直接な感覺的な叙法を取らせた誘引となつたとも思はれる。

このやうに様々の感覺を盛つて、それ〴〵の印象を明かにして居る作は珍らしい。それも自然な描寫であるために、少しも無理なく統一されて居る。

○

〔二二六〕散る芒寒くなるのが目に見ゆる（發句集）

行く秋になると、野も山も一面に芒の穂ばかり目立つて來る。その芒がほけて散りかゝる頃は最早寒さに間もないのである。ちら〳〵と芒の散るにつけて、寒さの迫ることを痛切に意識する山家の人の冬に對する恐懼が思ひ遣られる。これは一茶が故郷に隱棲後の吟である。一讀印象の鮮かな句である。

○

〔二二七〕山畠や蕎麥の白さもぞつとする（發句集）

前書に「老の身は今から寒さも苦になりて」とある。

山畠とあるので、山の峽々にちよつぽりとある畠地を想像して見る。白く群れた花は、梨の花なぞにもゾツとした感じがあるが、こゝでは地に敷かれた蕎麥の花であるのと、前書に依ると、おのづと雪が想像されてゾツとしたものと解せられる。然し、其處まで突込まずに、秋冷の氣の滿ちた山畠に雪白な蕎麥の花を見て、何かはしらずゾツと身に泌みた感じと解する方が、この句を活かす解し方であり、正しい見方でもある。この前書もあとから付けたものに相違ない。尤も、蕎麥の收穫後には雪が來るといふ理智から行つても、雪を聯想させる蕎麥の花の感じから行つても、寒さに對する豫感が、發想の主要動機となつて居ることは勿論であるが。

○

〔二二八〕稻かけし夜より小藪は月夜哉（旅日記）

秋の末になつて、稻を刈つて藪の廻りにかけた。その晩から毎夜月夜だといふので、實はその前夜

も前々夜も月はあつたのかも知れないが、稲をかけた爲めに藪に景色が添はつて、月夜の晩の眺めの的となつて來たことを利かせたのであらう。耕地をめぐらす小藪の落着いた景色が見えて居る。然し、「稲かけし夜より」といふやうな斷定的な表現法は、斯ういふ場合には作者の特色といふよりも寧ろ癖のやうになつて、嫌味を感ぜさせる一例である。勿論作者も得意とした句ではないが。

○

〔二二九〕 姨捨はあれに候とかゞし哉（發句集）

最近信州に遊んだ人の談話に、姨捨驛に下車して姨捨山へ行く道を尋ねたところが、「どの姨捨山へ行かれます」と聞かれて非常にまごついたさうである。「姨捨の山は何れぞ春霞」これがその時の知人の句である。然し、他國人である吾々は、一般に停車場のところにある山（その山の中腹を汽車が通つて居る）を、それと信じさせられて居る。曾てあの邊を通過したのは初夏の頃であつたが、車窓から見下すと、なるほど月の頃はさぞと思はれる廣寛な段だら田に、早苗が風にそよいで居た。

妻女山から筑摩川をかけての、あの邊一帶の見晴しは、信州と云つても非常に明るい感じのするところである。その明るい感じと、この句の持つ呑氣な氣分とはピッタリ合つて居ると思ふ。然し、姨

捨山の本家爭ひが昔から續いて居たとすれば、この句は或はもつと卑近な意味を持つて居るのかも知れない。若し左樣だとすると、この案山子はポスター染みて嫌になる。

○

〔二三〇〕 茸狩のから手で戻るさわぎ哉（おらが春）

よく見ることで、前々から辨當の用意なども大袈裟にして、歸りにはこの籠一杯山盛りにしてなどと勢ひ込んで出かけて行く。扨行つて見ると、素人連れの案に相違して、茸らしいものゝ收獲もなく、一日がゝりでくたびれまうけをして來る。道々、いま〳〵しさと、少し間の惡さと、然し、そこは事柄が事柄だけに執した失望といふでもなく、たゞがや〳〵とから騷ぎしながら歸つて行く。捕まへどころのないやうなところに、おのづと人情の機微が語られて居る。明るい客觀々照である。

斯ういふ句は、鑑賞者の方でも一茶といふ人物を念慮に置かずに、句そのものを眞直ぐに玩味することが出來て心地よい。

○

〔二三一〕 日本の外が濱まで落穂かな（發句集）

「外が濱」の地名は津輕沿海の地にあるが、此處では日本の外までといふ語呂をよろこんだもので、必ずしも外が濱を詠じたものと見なくてよい。前書に「米穀下直にて下々なんぎなるべしとは異國の人うらやましからん」とある。

「どうだい、こんなもんだい。」と、可憐な愛國主義者が大陸に向つて大見得を切つて居る。

この時代の人達の日本國といふ觀念を考へると面白くなつて來る。私の知人の家に菅廟の鏡背の日本圖の拓本を藏されて居るが、鏡は豐太閤の寄進で、慶長年間加藤清正の監督の下に鑄造されたもので、無論現存して居ることゝ思ふ。圓の中央に本土を描いて簡單に國分けをし、殘餘の浪形の空地に、四國九州、壹岐對島、淡路、小豆島までも散らしてある。そして、太閤桐と清正の桔梗の紋を重ねたものが四ケ所に刻されてある。まことに豐太閤當時の意氣を偲ばせるものであるが、ひいては、近代開國の機運に接するまで、一般に持ち續けて來た日本國の觀念の表象でもあると思ふ。

要するに日本を中心として世界といふものを考へて居たので、それだけでも太平樂を並べて居られた譯である。

○

〔二三二〕 旅人の垣根には さむ落穂かな（發句集）

旅人が道の端に落ちて居た稻穗を拾つて、傍らの垣根に一寸挾んで行つたといふ小さな動作の中に、質朴な人情がよく寫されて居る。と同時に、豐葦原の瑞穗の國に生れた人の稻穗に對する特殊の親しみ、寧ろ、むげに踏付けることの出來ない尊敬に似た優しさがよく語られて居る。

一茶は折よく斯ういふ情景に出逢つたのであらうが、こちらにそれだけの溫かい心用意がないと、斯ういふ興趣も無造作に見過して了ふものである。何よりも豐かな情味に牽かれる作である。

○

〔二三三〕 菊園や歩きながらの小盃（おらが春）

其角の五元集に「妓子萬三郎を供して」と前書して「その花に歩きながらや小盃」といふ句があるが、模倣といふほどむづかしい意味ではなく、興に乘つて平素愛讀して居る五元集の調子を借りたといふ程度のものであらう。

いかにも輕い調子で、馥郁として唉競ふ菊園の中の典雅な賑ひが彷彿する。一茶時代には非常に菊が流行つて、巣鴨の通稱殿中と呼ばれるあたりには數軒の植木屋があつて、屢々菊の品評會が催されて菊番附も出た。瓢の酒をさしつさゝれつ園の菊を見て歩くといふやうな、現今の何段返しの菊人形に樂隊入りといふ菊見とは似ても似つかない悠長な氣分である。

○

〔二三四〕入道の大鉢巻で菊の花（おらが春）

「入道の大鉢巻」といふ語で、理屈なしに鉢巻した大坊主の姿が浮んで來る。入道は正しく云へば佛門に入つた人の稱であるが、此處では何でも大坊主と見てよい。菊の鉢を抱えてあつちへやつたり此方へやつたり、肥料をやるわ、水をやるわ、專心に菊の世話をして居る人の樣を冷靜に叙したもので、入道と鉢巻と菊の花と、印象的にチョイ〳〵と抓んで暗示を與へて居るまでゞ、一言も說明を費してない。それで居て、人物、景、情、共に非常に鮮かに活躍して居る。人事描寫に勝れた腕を持つ一茶の特色の尖端まで延ばされた作だと思ふ。

○

〔二三五〕負け菊をひとり見直す夕かな（發句集）

「牡丹切つて氣の衰へし夕哉」といふ蕪村の句の氣分が思ひ合される。

丹精籠めて養ひ立てゝ、これならばといふ信念を以て出品した菊が見ン事蹴落されて了つた。夕暮獨り其菊に對して居ると、一途の憤らしさは次第に靜かな反省と代つて、とみ斯う見して居るうちに、更にしみ〴〵とした殘り惜しさと、手しほにかけた菊に對する愛憐の情が湧いて來て、押しつけられるやうな重い氣分になつて來る作者の內觀がよく寫されて居る。相手は植物であるが、おほろかな調の中に、複雜した感情が太く脈打つて居る。一茶の句の中でも特選に價する佳句である。

○

〔二三六〕夕飯や醬油かけても菊の花（七番日記）

何といふ露骨な、貧乏の表示であらう。句作動機となつた作者の心持は、「醬油かけて喰つたつて、これ見ろ、俺はこんな美事な菊の主だぞ」と、虛勢を張つて、案外樂しい氣分であるのかも知れないが、見せつけられる方では堪らない氣がする。一體、人間がこんなに貧乏であることは不自然だ。そ

の不自然さが強く私の胸を壓する。そして、時間的に何等の翹望も持たないやうな、斯ういふ境地に眞の藝術は見出さるべきでない。

この句はたゞ一茶の生活記錄として採錄して見たまでゞある。江戸放浪時代末期の吟である。

○

〔二三七〕ゆで栗や胡坐上手な小さい子（七番日記）

先入觀念に煩される嫌はあるが、私はこの句を見ると、小さな身體にきつちりと合つたカルサンを はいて、爐端に胡坐をかいて居る木曾の子供が思ひ出される。

上手に胡坐を組んだ膝にゆで栗を乘せて無心に皮をむいて居る。それ其儘が藝術品であるやうな、何といふ可愛い子供の姿であらう。

冬の部

○

〔二三八〕やあしばらく蜂だまれ初時雨（七番日記）

サラ〳〵と、木に……草に……軒に……それ〴〵に音を分けつゝ初時雨がやつて來た。

「あゝ暫く〳〵、こほろぎよ默つて居ろ。」と、蟲の音までも邪魔になる程、シンと時雨の音に聞入らうとする氣持である。蜂だまれといふほど、未だ蟲の音も衰へ切らぬ先に、早や初冬の表象のやうな時雨のやつて來たことを思はせる。一體昔の人は、時雨の音に對して特に深い興趣を感じたやうである。

調はやゝ狂言めいた諧謔を弄してあるが、一脈の寂しさの身に泌む作である。

○

〔二三九〕ぼた餅のくぺき空なり初時雨（七番日記）

「わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねてしるしも」といふ衣通姫の歌をもぢつてある。

吹荒れて居た風が何時か止んだと思ふ間もなく、押被さるやうに低く垂れ下つて來た軒の空から、やがてはら〳〵と初時雨がして來た。心淋しい、人戀しい、物欲しい折柄である。「斯んな時に誰かぼた餅でも持つて來て呉れるといゝな。何處からかぼた餅でも呉れさうな空具合だナ。」と、そんなことを考へながら獨り寢轉んでゞも居る。初時雨のして來るのは恰度亥の子の頃であるから、ぼた餅を聯想するのも無理はない。但、この句を必ずしも十月の亥の日に詠んだものと解するのは無理押しである。

極めてデリケートな歌をもぢつて、物もあらうにぼた餅を持つて來たところは頗る奇拔である。然も、初時雨の齎す佗しい氣分を其儘に傳へて居るところは、他の作家に望めない妙味である。

一茶は酒も嗜むには嗜んだが、大體が下戸と見えて、餅やぼた餅を詠んだ句を多く殘して居る。

○

〔二四〇〕寢莚にさつと時雨の明り哉（七番日記）

これも未だ放浪時代の吟である。寢莚は寢ござのことで、夏季のものであるが、これはもう時雨の降る頃、寢ござを敷いて晝寢でもしたのであらう。薄ら寒くさへあるに寢ござを敷いて戸締りもない處へ寢るといふだけでも、これは夜分ではない。旅情らしくも思はれる。

この時雨は寂び心に聞入るといふやうな靜かな時雨とは違ふ。風を交へてサツと來る雨音に、思はす薄眼を開けて見ると、そのサツと來る拍子に、横撫での雨脚が銀色に閃いて、其處らがホウと明るくなつて來る樣である。双物の切れ味を思はせるやうな鋭さがある。それで居て佗びた氣分を失つて居ない。近代人の好みに合ふ句である。

○

〔二四一〕人のためしぐれておはす佛哉（七番日記）

この句は一茶の句であるために、頭から諧謔趣味に受取れるが、もし他の生眞面目な作風の人の吟であつたならば、もつと異つた深い意味に解せられるに相違ない。輕い滑稽味を通して、この句には

幽かに神祕的な光が宿つて居る。

端然と坐した濡佛が時雨にぬれて居る樣を見て、作者は期せずして菩提心を起して居ると見られる。尤も作者は念佛宗の信者であつた故もあるが、無自覺安穩にいとなまれて居る衆生の生活の或る偉大な原動力のやうなものを、ふと魂に感じたのではなかつたらうか。「人のため」といふ上五に、何となく頭の下るやうな重さがある。然し、作者は恐らくそれと自覺せずして、持前の諧謔趣味で作句したつもりであつたらう。昔の人、尠くともこの時代の人達の藝術——俳諧に於ける理想は、面白く美しくといふ位の處に止つて居た。それだけ、昔の人の無自覺には尊いものが潜んで居る。

○

〔二四二〕重箱の錢四五文や夕時雨（おらが春）

「善光寺門前憐乞食」と前書がある。

乞食は一茶の好んで扱つた題材の一つである。この句は乞食の姿態動作を蔭にして、佗しい音を立てゝ降り過ぎる夕時雨と、剝げた重箱に散らばる四五文の錢を配して、一人の敗殘者を取卷く憐憫の情を一つの觀念として人の心に叩込んで居る。これは一茶の特色とする手法であり、同時に俳句獨特

の表現法で、俳句に印象詩の別名ある所以でもある。私はふと、先年讀んだ「ロダンの言葉」（高村光太郎氏譯）の一つを思ひ出す。

アトリエに於けるロダンが彫像の膝を手帛でかくしながら、

「脚を匿すとなをいゝでせう。お解りですか。眼があんまり散らされて居たのです。今度は下の部分が蔽はれて注意が皆顏と抱擁だけに集まる（中略）前より單純で、前より充ちて居ます。」

「ですがこんなに微妙な脚や足首を匿して了ふのは惜しう御座いますね。」

「——藝術では犧牲を知ることが肝腎です。」

○

〔二四三〕蛤のつひのけぶりや夕時雨（發句集）

「桑名」と前書がある。昔から桑名の名物燒蛤は有名である。

海岸近くの葦簾を張つた茶店などから、蛤を燒く煙が——必ずしも蛤を燒いて居るのでなくとも——細々と立登つて居る。其處へ時雨がして來た。或は、自身で燒いて居る蛤の口から白い煙が上る。その煙の行衛に當つて時雨が通り過ぎると解してもよい。何れにしても、夕日染みつゝ時雨つゝと云

つたやうな、茫漠とした伊勢平野から海に續くあの邊一帶の空の廣さを想はせるにふさはしい迫らない調子である。「つひのけぶり」と、諧謔を弄してあることも、私には寧ろ作者の小さな生物に對する無常觀から根ざした自然の聲のやうに思はれる。恐らく作者の眼界には、蛤の殼の山でも積まれてあつたことであらう。靜かに吟誦すると、泌々とした旅情の湧いて來る作である。

○

〔二四四〕 木がらしや折介歸る寒さ橋（おらが春）

折介は最も下等な武家の用人の稱である。紺かんばんに淺黃木綿の帶。卽ち畵で見る奴さんの扮裝である。あの尻切はんてんのいでたちで木がらしに吹かれて橋を渡つて行く後姿は、いかにも寒さうである。それに、歸るとあるので一層淋しい趣きが見える。武家屋敷は何れも淋しい方面にあつた。この句なぞは先づ本所邊であらう。遠景に練塀の見える橋の袂の枯柳などを聯想させる。「寒さ橋」といふ文法を無視した用語が、此處では少しも氣にならず、然も一句の情景を確りと極めて居る。一茶の特色の出た佳句といふに異議はなからう。

○

〔二四五〕 木がらしやからびされし按摩坊（おらが春）

寒月やむだ呼びされし座頭坊　（文化十三年）

夜按摩やむだ呼びされて降る時雨　（文化十四年）

夜時雨やから呼びされし按摩坊　（不詳）

一端捉へた興趣に飽くまでも執する一茶の句作態度の一例として類句を擧げて見た。尤も、どの句もこの調子で作られたのでないことは勿論であるが、斯ういふ例は可なり多いのである。

然し、この四つの句を並べて見ると、作者の頭の中に順繰りに推移して行く情景や、一句々々に練られて行く辭句の變化の迹が可なり面白く感ぜられる。一茶の句作態度については、他日更に稿を改めて語つて見たいと思つて居る。

○

〔二四六〕 霜枯や鍋の墨かく小傾城（發句集）

「追分」と前書がある。信濃追分は一茶が江戸と鄕里への往復の道すがらで、今こそ荒凉たる古驛の

俳を止めて居るが、木曾名所圖繪にも「沓掛まで一里三丁。宿よし出女あり」とあつて、昔はなかなか榮えた宿場であつた。

然し北陸道と善光寺道との分れ路であるこの追分は、霜枯時には特に人足も稀になつて、町中に直接淺間颪の吹き荒れる樣が思ひやられる。その宿場の小流れの端などで、構はないみなりをした宿場女郎がしきりと鍋墨をかいて居る。いかにも鄙びたさびれた情趣である。「小傾城」は、若い女郎、若しくば餘り目立ちもしない女郎位の意に解してよい。

○

〔二四七〕水仙や垣にゆひこむ筑波山（發句集）

紺青の襞の鮮かな冬季の筑波山を背景とした庭、若しくば野面の家居の樣であらう。筑波山が恰度垣の中に圍まれて居るやうに見えて、その垣には水仙が咲いて居る。非常に綺麗な景色である。「垣にゆひこむ」は要するに技巧であるが、さういふ景色に接した場合、私達もやはり心持の上でそんな風に表現して見たいだらうと思ふ。嚴密な批判態度でなく、一寸珍しい錦繪でも手に取つて見るつもりで鑑賞するによい句である。

この句の初案「冬枯や」とあるが、美しいだけを生命とするこの句にあつては水仙を點じた方がよい。實景であるかないかといふやうな論議は止めることにする。私達の云々する藝術的良心と、一茶の持つて居た藝術的良心とは、おのづから時代の異る如く異つて居るのであるから。

○

〔二四八〕猫の子のちよいとおさへる木の葉哉（句帳）

ヒラ〳〵と散りかゝつて來た木の葉を見て、いたづらげに首をかしげて、しなやかな丸い前足を曲げて一寸おさへて見る小猫の恰好が、何とも云はれず可愛く感ぜられる。

中七の「ちよいとおさへる」に、いかにも柔かい響きがある。

○

〔二四九〕楢の葉の朝から散るや豆腐桶（發句集）

風のために小波の立つ豆腐桶の水に、まはりに鋸齒を持つ美しい楢の葉の散り込む樣は頗る印象的である。楢の葉と斷つてあるところがこの句の生命である。

楢の葉は美しく紅葉するがばら〳〵散つて了はないもので、翌春まで枯林の中に淋しい色彩を止めて居る。朝から楢の葉の散ると云へば相當に風の荒い日であらう。武藏野あたりをそこはかとなく歩いて居る時に出逢ふ小部落の、障子に屋號を書いた板屋根の豆腐屋などを聯想させる。一見平凡な叙景ではあるが、寂びた、冴えた、初冬の郊外の景趣を巧に描き活かして居るところは、さすがに冴えた手腕である。

○

〔二五〇〕落葉して日向に醉ひし小僧かな（發句集）

繩で編んだ干大根でも澤山に吊してある藏の庇のやうなところを想像して見る。まはり中の木がすつかり落葉して其處ら一面あらはに日が當つて居る。そのカサ〳〵した落葉を浴びて莚でも敷いてある上に、男の子が赤い顏をしてぼんやり坐つて居る。私は初めこの「醉ひし」を酒に醉うたこと〻思つて居たが、田舍では「日向に醉ふ」といふことを言ふさうで、これは日向でのぼせた樣である。「小僧」はたゞ男の子と解してもよい譯であるが、此處ではどうも、酒屋の樽拾ひなぞが骨盜みをして日向ぼこをして居るうちに、餘りに強い日射しに輕い眩暈でも感じて來た樣と解する方がふさはしい。

「落葉して日向に醉ひし」は、いかにも滑かな調である。冬の日の村方の大平な氣分が漂うて居る。

○

〔二五一〕落葉して三月頃の垣根かな（發句集）

葉を振り落してすんなりとした枝ぶりが、恰度これから芽出しの頃の樹容を思はせるのである。小春と呼ばれる通り、初冬の暖かい日ざしが三月櫻月の頃の長閑さに照つて、垣根の下には落葉を踏んで小鳥でも遊んで居ることであらう。「三月頃」と、あつさりした言葉が、自由な、然し作者の意圖を裏切らない程度のなごやかな氣分を誘ふ。恐らく誰も〳〵感ずる初冬の春めかしさではあるが、危うげのない形容を捉へた作者に功を奪はれて居る。

○

〔二五二〕蔦ひよろひゝよろ神のお立ちげな（七番日記）

神送、神の旅、神の留守等、總て陰曆十月の季題である。神無月と呼ばれるとほり、十月一日には神々が旅立つて、出雲の大社の大評定に會すると傳へられて居る。

十月一日の朝のほがらかな蒼空に、ひゝひよろゝゝゝと、鶯の上る聲を聞いて「おゝ神々のお立ちの頃だな」と思ふ、やゝとぼけた感じである。元より説明を要するやうな句ではないが「鶯ひよろひゝよろ」と、やゝ間を延して、坐五「お立ちげな」と、無造作に片付けたところは、いかにも氣分にふさはしい輕い調子である。そして、言外に十月の蒼空を鮮かに印象させるところに、この句の特殊の生命がある。

○

〔二五三〕菜畑を通して呉れる十夜哉（おらが春）

近くの寺で、十夜の鐘が鳴り響いて居る。もう御法談も進んで居るだらう。名物の念佛踊も始まる頃だ。遲れて心は急くが、寺はツイ其處に黑々と見えながらも、畦道をグルリと廻つて行かなければならない。この菜畑を通り抜けて行けば直きなのだがナと、思はず足を止めてためらつて居ると、其處の灯のさす家から年寄の聲でもして「構はずと其處をお抜けなんしよ。」といふ風に云つて呉れる。十夜の晩にふさはしい優しい人情を捉へて居る。

○

〔二五四〕手序に煙管みがくやお取越（七番日記）

お取越は門徒が親鸞上人の忌を修することで、忌日は陰曆十一月であるのを、取越して十月に修するためにこの名がある。お取越しの前には佛壇を掃除して、眞鍮の佛器造花等、それ〴〵磨きをかけるのである。そのついでに一寸煙管も磨いたといふ、なるほど有りさうなことで、佛壇ばかりではなく、家の中もさつぱりと、持物まで綺麗にしたくなるいそ〳〵した動作の中に、溫い人情が籠つて居る。

凡そいかなるものでも自分の經驗の中に入つて來るものは逃さない作者である。こんなものまで句にして或る效果をあげて居るといふところに、人の眼を開かしめる。

○

〔二五五〕杉箸で火をはさみけり夷講（七番日記）

「八兵衞さん濟まねえがそつちの火鉢に種があるかね。」

「よし來た。」

使ひさしの杉箸でヒョイと火を挾んでやる。

紅い燈火、てら〳〵と光る額。くづれて來た談笑。大分酒の廻つて來た頃の夷講ふるまひの一座の賑しさを、白い杉箸に象徴して、一寸氣の付けないやうな片隅の描寫に依つて、可なり緻密な風俗畫も及ばないほど濃厚な氣分を出して居る。

今更ではないが、作者は人事の描寫については、實際獨特の呼吸を心得て居たと思ふ。

○

〔二五六〕冬の梅目もあてられぬ月夜なり（旅日記）

「目もあてられぬ」といふ言葉は、大てい、淺ましいとか氣の毒とかいふ場合に用ゐられる。「貧しい家に病人の寢並んで居るみじめさは目もあてられぬ」とか。「盛裝して泥濘の中を行く姿は氣の毒で目もあてられぬ」とか。

然し、斯ういふ綺麗な景色について云はれることは殆んどないと云つてよい。それで居て、双物のやうに冴えた月光が凍てた大地を洗つて、梅の花の白さもゾッと身に泌みるやうな寒夜の光景のハッキリと意識されるのは不思議である。「月夜なり」と、斷定的な坐五も、悽愴な氣分をウンと引締めて

居る。

○

〔二五七〕寒月に立つや仁王のからつ脛（句帳）

上五の「寒月に」は、「名月や」といふやうな感じの廣い語とも違つて、非常に印象的である。仁王と云へば通例仁王門を想像させる。仁王門の深い庇を越して恰度仁王の脛のあたりに月光が落ちる。筋骨たくましい朱塗の仁王様の足も、凍る夜氣の中に皎々と照る月光を受けて、さすがに寒さうに見える。寒げな、然し力强く踏ん張つた裸の足の感じが、「からつ脛」といふ坐五に適切に表現されて居る。猶一段神經を細めるならば、この句にはからつ脛だけが現はれて居るので、脛から上の魁偉な仁王の身體全體が、薄暗い隈を取つて次第に幻想の中に浮び上つて來る。この場合に於ける「立つや」の句切れは、調を大きくするばかりでなく、不思議に暗示的である。

此處では「重箱の錢四五文や夕時雨」の條に引いたロダンの言葉が、逆にあてはまつて來る譯である。

○

〔二五八〕門口に來て凍るなり三井の鐘（七番日記）

全體から受ける感じに依つて、これは夜の鐘である。冴えた夜の空氣の中にゴーンと打ち出す鐘の音が、湖水に近い靜寂境を縫つて、一つの物體のやうな固い感觸を以て、聽覺――寧ろ觸覺と云つた方がよいかも知れない――に迫つて來る。それが門口までずうんと響いて來て、其處でぷつりと餘韻を斷切つて凍てついて了つたやうな感じ。これは對外の全感覺と、靜かな內省の主觀とを際どく結合させた極めて危險な行き方をした作である。斯ういふ句は、譽める人は非常に譽めるだらうと思ふ。覇氣のあるどつしりした調子は、何處やら天明の蕪村を想はせる。然し、私のやうに漫然とした頭を持つ者には、多分に理智的要素を含む斯うした句は、固過ぎて、どうもしつくりとした好みに合はない。

然し、何れにしても凡手でない。作者の脂の乘り切つて居た時代の作である。

○

〔二五九〕冬籠その夜に聞くや山の雨（發句集）

曾て山國の人に聞いたことであるが、冬籠といふ季題は、暖國に於ては實際にその氣分を味へないさうである。

家の周圍に葦簾を卷き庭木などにもそれ〴〵雪圍ひして、薪を貯へ、食物の貯藏も濟せて、扨これからいよ〳〵長い冬を籠らうとする用意のとゝのつた恰度その晩、待受けて居たやうに雨が降つて來た。未だ物珍しい炬燵に入つて聞く山の雨。蕭々と落葉に降りそゝぐ雨音が、又なく佗しく、然しそれで初めて冬籠の氣持ちになり切つたやうな、極めて落着いた氣分に聞かれるのである。「その夜に聞くや」の中七の句切れに、シンと耳を澄して居るやうな餘韻がある。氣分にふさはしい靜かな調子である。

○

〔二六〇〕五十にして冬籠さへならぬなり（旅日記）

勿論、家なしの放浪を嘆いた句である。何の考證もなしにこの句を見て居た時には、一茶の苦い涙を見せたしみ〴〵とした句だと思つて居た。然し、この句の詠まれたのは文化三年一茶四十四歳の當時である。早老、少くとも氣分に於て早く年寄染みた昔の人は、四十そこ〳〵で最早五十の氣分にな

れたのかも知れないが、現代人の心理から推すと、四十三や四で五十のことを云つて居るのは、若い娘がジミな物を好んだり、二十二三にもなると「我が青春逝かんとす」など〻詠嘆して居る人のやうに、自分自身を甘やかして強ひて淋しがつて居るやうな、餘裕ある心持に受取れるのは僻目か。

一茶もほんとうの五十歳を迎へた正月には、

おのれやれ今や五十の花の春

など〻力んで居るのは、この間の消息を語るものではあるまいか。

一體、一茶の作品の或物には、多くの不幸な人々に多少その傾向のあるやうに、自らの不幸を强調して見せる癖、自らの薄倖を見せびらかすやうな嫌味が附纏つて居る。

○

〔二六一〕能なしは罪も又なし冬ごもり（おらが春）

非常に靜かに澄切つた老境が窺へる。現代人、殊に若い人達は斯ういふ退嬰氣分を一概に排するが、やはり年を取れば懷しくなつて來る境地であらうと思ふ。前の句と比べて見て、一人の人間の心の跡を辿つて見ることも興味がある。

○

〔二六二〕椋鳥と人に呼ばるゝ寒さかな（おらが春）

「東に下らんとして中途まで出でたるに」と、前書がある。

特に「信州の椋鳥、甲州の山猿。」など〻も呼ばれるさうなが、一般の田舍者を指して椋鳥と云ふことは衆知の事實である。地方人が着脹れて打群れて歩くことから思ひ付かれた惡口である。

長く江戸に居ても一向に江戸染みた樣子もなく、殊に服裝にかまはない貧しい一茶のことであつたから、姿はいつも田舍々々して居たことであらう。然も人並勝れて神經の鋭い一茶のことゆゑ、一寸した人の蔭口もグツと癇に障つて、さぞ旅の氣分を腐らされたことであらうが、さすがに若い時のやうに角立たず、不快を他所事に、冬枯の街道の旅情に托して居るところは老手である。

○

〔二六三〕次の間の灯で膳につく寒さ哉（發句集）

「旅」と前書がある。

長い漂泊生活のそれ自身が一つの旅であつたが、殊に屢々貧しい道中をした一茶は、旅の辛苦を身にしめた人であつた。旅といふ意識の上に立つ彼の作には、何れにも、貧しさ、苦々しさ、淋しさの出て居ないものはない。

一人と帳面につく夜寒哉

雁啼くやあはれ今年も片月見

椋鳥と人に呼ばるゝ寒さ哉

斯う寢るも我火燵ではなかりけり

しぐるゝや家にしあらば初時雨

霞みけり憎い宿屋も迹の村

旅を栖所として悠々と風懷を漏して居たやうに蕉門の人達なぞに比べると、此處には自ら慰めることを知らない我執の強い一人の人間の姿が見出されるのである。

○

〔二六四〕ひいき目に見てさへ寒きそぶり哉（發句集）

「おのれが姿にいふ」と、前書がある。自畫讃である。

この句も苦吟の好例である。私はよい意味に於て、一句をよりよく活すためにこれほど腐心改刪した作者の努力の迹を傳へておきたく思ふ。

左に「俳諧寺一茶」中の引例を借用して解釋に替へる。

賛

うしろから見ても寒げな天窓哉（文政元年）

自　像

ひいき目に見てさへ寒き天窓哉（同　）

ひいき目に見てさへも不形な天窓哉（同　）

ひいき目に見てさへ寒し影法師（同　）

おのれが姿にいふ

ひいき目に見てさへ寒いそぶり哉（文政二年）

ひいき目に見てさへ寒きそぶり哉（同　）

一句々々に、作者の苦心傾倒の跡が辿れるではないか。

○

〔二六五〕玉霰よたかは月に歸るめり（七番日記）

「よたか」は江戸時代の下等な賣女の稱である。四谷鮫ケ橋、芝愛宕下其他、殊に本所吉田町は代表的の巣窟であつて、毎夜一つ目辨天、兩國橋、濱町河岸等要所々々に稼ぎに出かけた。吉田町ばかりではなく、一茶の永らく柱んで居た本所五つ目あたり一圓にも多く巣くつて居たことゝ思はれる。從つて斯うした風情も目馴れたものであつたらう。

坐五の「めり」は、一茶としては珍らしく不確定な語尾である。これは一茶が目のあたり彼女等の姿を見たのではなく、雨戸の隙から月の漏るやうな侘住居に寢心地寒く眼醒めて居る時、恰度霰がして來て、折柄打連れて歸つて行くらしい女達の話し聲や、冴えた下駄音でも聽いたのであらう。一茶は「よたか」を侮蔑の概念を以て扱つて居ない。折が折といふばかりでなく、場所の關係から、自然彼女等の日常生活に接する機會も多かつたらうし、それから、作者の貧しい生活狀態から押して見て、恐らく、もつと直接に彼女等と交渉を持つやうな機會も作られたであつたらうことが憶測される。然し、彼女等を單に玩弄物視去るには、一茶の感情は餘りデリケートに働いて居た。生活のために自ら

虐げて行く淪落の女の運命にそゝぐ一掬の涙がこの句の裡を流れて、一句にしんみりとした味が出て居る。「玉霰」といふ語も、時に取つて美しい叙詞である。

派手な木綿縞の着物に鼻の頭だけ白粉を施して、手拭を被つて行くやうな女達の姿が、霰する寒夜の月と配して毫も嫌味を止めず、對者の腦裡に美化されて映ずるのは、純化された感情から生れ出た詩の賜であらう。語尾の「めり」に嫋々たる餘韻がある。

○

〔二六六〕初雪や緣から落ちし上草履（發句集）

何とありふれた景趣であらう。そして、いかに吾々がむなしく見過して居る景色であらう。吾々の眼は兎角遠視眼で困る。人世の批判に於ても、作詩の態度に於ても。「先づ足許を見よ。足許を見よ。」と、作者は作品を通して吾々の前に無言に語つて居る。

○

〔二六七〕闇の夜の初雪らしやぼんの凹（七番日記）

「ひどく底冷えがして來たが天氣はどうかナ。」と思つて、軒端に立つて空を仰いで見ても、暗憺とした空と山のけじめも分らないやうな眞の闇夜である。靜寂な大地にしん〳〵と泌みて來る寒さに追はれて、家の中に引返さうとする途端に、襟元がヒヤリとした。

「オヤとうとやつて來たかナ。」

といふ刹那の感じが、非常に印象的であり感覺的である。

「初雪らしや」とある中七に依つて、吸込まれるやうな闇の深さと、ほんの思ひ出したやうにチラリチラリと降り出して來た初雪の淡さも感ぜられる。輕味の中に何かしら鋭いものを含む一茶の特長を發揮して居る。

○

〔二六八〕初雪のふりすてゝある家尻かな（おらが春）

家尻と云へば家の裏手、日向きの惡い畑地などを想像させる。「ふりすてゝある」は、ふつたまゝになつて居るの意である。薄すらと降つた初雪が、其處だけ地面から吸ひ殘されたやうに淡く解け殘つて居る樣である。「ふりすてゝある」といふ中七の極めてデリケートな響きに依つて、ほのかな景色を

浮び出させて居る。氣分にふさはしい辭句の强弱といふやうなことも、長い修練に依つて自然作者の手に入つて居る。

兎に角、ヤマのない景色をこれだけに描き活すことは、凡手の眞似難いところである。

○

〔二六九〕初雪や鳥もかまはぬ女郎花（發句集）

ひよろ〳〵とした女郎花の未だ枯れ了はね先に初雪のして來る可憐な情趣が見えぬでもないが、これは恐らく擬人で、霜枯時の宿場女郎などに客足の通はぬ樣を諷したものであらう。七番日記には上五「雪ちるや」とあつて、隨齊會に於ける題詠である。要するに言葉の遊戯であるに過ぎぬ。

○

〔二七〇〕心からしなの〻雪に降られけり（旅日記）

父の歿後、弟仙六と遺産について確執を續けて居た時代、一寸歸省した折の吟である。

「心から」といふ思ひ迫つた表現に、深々と降り積む雪に埋れて身も心も行きくれたやうな作者の暗

い涙が光つて居る。この世に於て、近親と親しむことの出來ないほど、故郷に歸つても足を延す場所も持たないほど、人の心を孤獨の哀愁に追ひ遣るものはあるまい。何と云つても一茶は不幸な運命の下に生れた人間であつた。この句には、この後に詠まれた茨の花の句（夏の部參照）の如くヘンに突かゝつたところのないために、反つてしみ〴〵としたものを感ぜさせる。

○

〔二七一〕うまさうな雪がふうはり〳〵と（發句集）

たしかに面白い句である。この句も幾回か改刪した果になつた句で、七番日記には「ふうはりふはり哉」とある。又、この句に「擬惟然坊」と前書を附した眞蹟も殘つて居るが、これは恐らく、自分の句が偶々惟然調に似て居た爲めに興じたまでゞ、無論一茶は惟然を好きではあつたらうが、この一事に依つて惟然に心醉し切つて居たと見るのは早計である。

惟然は蕉門の奇人として有名な人で、隨分思ひ切つた破調を試みて居る。二三の例を擧げて見ると、

水さつと鳥はふわ〳〵ふうわ〳〵

梅の花赤いは〳〵赤いはな

若葉吹くさら〳〵さつと雨ながら

然し一茶は想に於ても調に於ても、これほど放縱な行き方をして居ない。どんなに洒脫飄逸を生命とする句でも、一茶の作には必ず石橋を叩いて渡る式の几帳面さのあることを忘れてはならぬ。

○

〔二七二〕ぽちや〳〵と雪にくるまる在所哉（發句集）

「在所」は單に在鄕とも、故鄕とも解せられるが、何れにしても都會から隔たる地であることに變りはない。

家も立木もすつぽりと雪に埋れて、直線といふ直線の總てはなだらかな曲線に覆はれて、一と里の見渡しが、恰度綿に包まれた玩具かなぞのやうに見える。「ぽちや〳〵」は、子供が肥つて可愛い樣などに云はれる語であるが、實に一茶でなくては、斯んなに思ひ切つた適切な言葉は思ひ付けまいと思ふ。この句を見ると、雪本來の性質を忘れて、ちま〳〵とした暖かさうな景色が眼前に浮んで來る。

○

〔二七三〕 ちとたらぬ僕や隣の雪もはく（發句集）

「門番の直ぐに掃いたる一葉哉」といふ也有の句があつたと思ふが、それと同じやうな、年百年中つとめ大事と下ばかり見て働いて居るやうな愚直な人物を彷彿させる。隣の雪まではいて禮でも貰はうとする下心があるでもなく、恐らく、權柄な隣家で、禮も云つて呉れ手はないのであらうが。

然し、僅か十七文字の中に、おろかなひとりの人の人世の摑まれて居ることを思ふと、ふと笑へない氣がする。

○

〔二七四〕 雪ちるやおどけも云へぬ信濃空（おらが春）

「雪ちるや」と云へば、初雪でないまでも深雪の感じはない。これからいよ〳〵山國の雪の季節（シーズン）にならうとする時であらう。私達、東京あたりに住む者は、實に無造作に、遊戯氣分で雪を眺めて居る。然し、雪國に於て雪の季節に入るといふことは、土に親しみ他人に親しむその年の生活を終ることである。幾月かの間、穴藏のやうな家の中の爐端に世界を限られて了ふことである。低く覆被さつて來

る空からいよ〳〵雪を見るやうになると、もう今年もおしまひだといふ思ひが期せずして皆の心を暗く壓して了ふことであらう。それには、薪の取置、食物の貯藏、家屋の繕ひなど、それ〴〵冬籠の用意に追はれて居ることであらう。例よりも早く初雪を見た年など、未だ十分用意の整つて居ない貧しい人達なぞは、と胸をついて顏色を變へるといふことである。實際、雪國の人の雪に對する感じは、私達とは全く違つた嚴肅なものであると思ふ。

坐五「信濃山」とある眞蹟も殘つて居るが、やはり「信濃空」の方が對象を廣くするために、一層感じが深まつて居る。

○

〔二七五〕 雪ちるやきのふは見えぬ借家札（發句集）

前書に「石の上の住居のこゝろせはしさよ」とある。

この句が初めて七番日記に見えるのは文化十年の冬で、既に故郷に居所を定めて、江戸俳壇から引退しようとして居た時代の作であることも興味深い。今も昔も變りなく、推移のはげしい都市生活の、借家札は表象である。近親に對してあれほど反感を抱きながらも、一茶の心を飽くまでも故郷の方に

引きつけた一因は、この都市生活のはかない實相にあつたとも云へる。

上五「雪ちるや」は、忙しげな氣分を出すために非常によく利いて居る。

○

〔二七六〕彼是といふも當座ぞ雪佛（おらが春）

雪佛は雪だるまのこと。

年々雪のあとに必ず出逢ふ光景で、子供の戯れにいつか大供まで加勢して、臺所からタドンを徴發するやら、松葉を持つて來るやら、ャレ眼玉の髭のと大騒ぎをやつて門口一杯の雪佛を建立しても、どうの斯うのと行きずりの人まで珍しがつて見るのは當座のうちばかりで、やがて足駄の齒の跡をつけられるのを初めとして、それからは解けるにまかせて、誰も顧る者もなくなる。浮薄な人情に禍された雪佛の悲慘な末路も、一代の俳人一茶に弔はれて、雪佛亦以つて瞑すべしといふべきであらう。

○

〔二七七〕雪汁のかゝる地びたに和尚顔（旅日記）

「玉の盃底なきがごときといへど、色好むは人性にして、好まざるは獲鱗よりも稀なり。あるは染殿の姫を思ひ、あるは物洗ふ女に迷ふ。やごとなき憎正、雲に住む仙人すら此一筋は踏み留めがたくやありけん。僧教導は佛道のいさほしも九五近き身の戒を破りし罪となん、巷に面晒さるゝ、よそ目さへいとほしく、にがゝしくぞはべる。」これだけが前書で、文化元年十二月、鎌倉圓覺寺の老僧が、女犯のため日本橋に晒された當時の日記の一節である。この句は前書なしでは獨立せぬ。

日本橋の南詰、今の白木屋と反對の側の橋話に高札場があつて、その下に莚を敷いて、女犯は着衣のまゝ兩手を縛られて三日の間晒されたものださうである。思ひ遣るだけでも堪らない事實である。人事に深い關心を持つ一茶が、目のあたりその淺ましい姿を見てどんな氣持がしたらう。「いとほしく、にがゝし」といふ簡單な言葉に、作者の胸裡の消息が語られて居る。

それから、この「雪汁のかゝる」は、無論雪後の泥濘のはねかゝることゝ、今一つ「斯かる地びたに和尚顔を晒す」の意がかゝつて居ると思ふ。一茶の句を通して見ると、折々古風な言掛け緣語を樓した跡が見える。尤も、大てい語勢を受けた場合で、古俳諧に見るやうなわざとらしい嫌味はない。

この句も左様解した方が一層意味が深まつて來る。

言掛け縁語は、現今は謠ふ性質を有する歌詞以外には顧られないが、そして、勿論推奬さるべき性質のものでもないが、これも日本語の持つ一特色として、一概にけなしつけて了ふばかりが能でもあるまいと思ふ。

○

〔二七八〕これがまあ終の栖か雪五尺（七番日記）

發句集には「十二月廿四日古郷に入」と、前書がある。日記に依ると、文化九年十二月廿四日に初めて歸住の意味で故郷に入つて居る。つまり歸住當時の感想である。

十數年に渡る醜い爭ひを經て、辛うじて身を入れるだけの軒と、僅の山畑を取戻し得て、やう〳〵のことで落着くことの出來た故郷ではあるが、長い間自由な放浪を續けて來た人だけに、常時雪五尺といふ冬季の柏原に直面しては、恐らく悲痛な感慨に胸を打たれたことであらう。「これが死所か」といふ深い嘆聲も、極めて自然な心の經過を語つて居る。

○

〔二七九〕衽なりに吹込む雪や枕もと（發句集）

前書に「一茶病中のていたらく」とある。戸の隙間などから、細く斜めに末廣がりに雪の吹込んで來る樣であらう。それだけで可なり佗しい暮しの樣を想像させる。

一茶が初めて中風に罹つたのは、彼の五十八歳の文政三年十月十六日であつたが、幸ひに輕症であつて、十二月頃には幾分か歩行も出來るやうになつて居た。この句はその折の病床吟である。

翌春は病癒えて自ら蘇生坊と號した。「今年から丸まうけぞよ婆婆の空」の吟がある。

○

〔二八〇〕眞直な小便穴や門の雪（句帳）

甚だ尾籠ではあるが、一茶は斯ういふ句を平氣で作つて野性を發揮して居る。だが、深々と雪に降り埋められて居る門口に顔ばかり出して用を足して行く虫けらのやうな人間の生活。そのむさくるしい變化のない環境を持ちながらも、平然として自己の周圍を享樂して居るやうな作者の態度には動か

し難いものがある。取材の如何に拘らず、作者の眼に映じた門口の明るさだけの感ぜられるやうな作である。

○

〔二八一〕むら千鳥そつと申せばはつと立つ（おらが春）

「ソツと申せばソツと申す」とかいふ地口がある。あゝ云へば斯ういふ、ツベコベと云ひ抜けする形容にも使はれるが、又、だつこと云へばおんぶといふやうに調子に乗つて來る樣、或ひは、以心傳心互ひの意氣の合ふ場合などにも使はれるやうである。然し、そんなことは如何でもよい。間髪を入れない言葉の調子を借りて、むら千鳥のハツと思ふ間もなく一勢に飛び立つ有樣を叙して息もつがせぬ。地口も斯う活かすと面白いものである。むら千鳥は無論群千鳥の謂である。

○

〔二八二〕飯の湯のうれしくなるや散るみぞれ（旅日記）

一茶の藝術が未だ完成といふ域に達しなかつた頃の江戸時代の作の中に、往々この種の純眞な感情の流露に出逢ふのである。

獨り者の貧しい食事を終へて、食後の湯を飲みかけて居る時に、ひどく揉めて居た天候が急にサラサラとみぞれて來た。「あゝみぞれがして來たナ。」と思ふと、急に心持ちがわく〳〵して來て、今吹いて居た飯の湯の熱さも、柔かく立ち登つて居る湯氣も、無性に嬉しくなつて來る——何といふ子供らしいときめきを傳へる句であらう。然も、最早四十四歳にもなつて窮迫して居た人の吟なのである。

因に「みぞれ」は、理科の方では半解の雪、即ち雪と雨と交つて降るものとされて居るが、一般には、不透明な霰の極く細粒のものゝ降ることを云はれて居る。尠くとも關東一圓に用ゐられて居る「みぞれ」の語義は同樣であると思ふ。この句のみぞれも無論そのサラ〳〵したみぞれである。

○

〔二八三〕野は枯れて何ぞ喰ひたき庵かな（旅日記）

特に注意をひくものもない冬枯の野を見通す庵の、午前十時頃の暖い日ざしに、唇のカサ〳〵と乾いて來るやうな氣分である。現今なれば、小遣錢のないために、折角の日曜を下宿の二階に寢轉んでも居ると云つた調子である。

前の句と同時代の作で、無論生硬の嫌ひはあるが、後年の圓熟境に於ては寧ろ望むことの出來ない、非常に自由な大膽な感情の放射を試みて居る。

私は一茶の失意時代から稍々得意の時代へ移る階梯としての、文化初年の江戸日記（旅日記）に多くの興味をひかれるが、全體を通じての一茶の藝術を紹介する目的を持つ本書に於ては、比較的早期の作を多く收め得ないことは遺憾である。

○

〔二八四〕五六匹馬干して居る枯野哉（句帳）

一茶は一つの構想に執するばかりでなく、一つの珍奇な用語に執する場合も少くない。七番日記には「春風や馬を干したる門の原」とあつて、その他にもこの「馬干して」といふ語に戀々として居た跡がある。暖かい春の日、或ひは冬の日を浴びて、春野、或ひは枯野に靜かに馬の點在して居る景色は或程度まで描かれて居るが、何としても「馬干して」には無理がある。結局彼の理智的の技巧が、彼の内面から湧上る情味と完全な一致を見なかつた一つの例である。

○

〔二八五〕朝晴にはちく〳〵炭のきげん哉（七番日記）

櫻炭折々はぬる音のよしさらひの前の緋毛氈の上

これは自分が未だ琴の稽古になぞ通つて居た頃の腰折であるが、よく似た氣分を扱つてあるので、思ひ出して引用して見た。

歌の方は甘い情味をうたつて、横に、場所と氣分を浮び出させてあるが、句の方はいかにも直裁に、無駄なく、寧ろ氣分を排して直接感じに肉迫して居る。從つて、必要上天象と時を同時に現す「朝晴」といふやうな語も選まれる譯である。句と歌とのおのづからなる氣分と感じとの相違、句と歌との各々の持場を味ふための一例ともならうと思ふ。尤も斯んな歌を例としたことは、大方の歌人に對しても歌そのものに對しても非常に失敬ではあるが。

○

〔二八六〕宵々を見へりもするか炭俵（旅日記）

本所五ツ目邊に住んで居た頃の吟である。當時の日記から炭の句を拾つて見ると、

炭の火や夜は目につく古臺
ちとの間は我宿めかずおこり炭
炭くだく手の淋しさよかぼそさよ

何れを見ても窮迫の極にあつたことが思はれる。

「宵々を」は「宵々に」と云つても意味としては大差はないが、この文字に漠とした餘韻が含んで居る。「見へりも」のもと共に吟誦して見て感ずるより外ない。「見へりもするか」は、見へりもする哉で、もは強めの添字であるが、同時にこのもとか文字に輕い疑問、卽ち餘り度々見るために見減りでもするのであらうか、といふやうな意もかゝつて居る。宵毎にげつそり〳〵減つて行く炭俵を見て、非常に心細く思ふ意である。

一句々々の解釋よりも、この句の中に流れて居る佗びた氣分を汲んで貰ひたい。

○

〔二八七〕酒五文つがせてまたぐ火鉢哉（句帳）

道中膝栗毛の中に一合廿四文といふ酒の勘定が見えるから、惡い地酒でもあれば五文で一寸一杯引

かけられたのであらう。これは先づ居酒屋の光景で雲助などの風體を聯想させる。この句に於ては、「酒五文」が氣分を出すために重要な役目をつとめて居るのであらうが、斯ういふ句は年代を經るに從つて判りにくくなる。もう五十年も經ればもつと判らなくなるであらう。繩のれんを知る私達には、炭火を圍んで荒くれ共が顏を火照らせて居るじめ〳〵した酒場の紅い醉が相當に判るつもりである。

○

〔二八八〕燒穴の日に〳〵ふえる紙衣かな（發句集）

紙衣の生地は更紗を置いたもの（大阪製）もあるが、大ていは手製で、生紙に幾度も澁を引いては揉んで柔かにして袖なしや半纏などを作つて着る。ふく〳〵とした紙衣其物が既に靜かな老を象徵する極く佗びたものである。その紙衣に、吸殼の粗相などで日に〳〵燒穴のふえて行くことは、冬の深さと共に、其處に繰返されて行く坦々とした生活が物語られて居る。夜も晝も、爐邊を命として、默々として自然の意志に從つて居るひとりの人の心の姿を見るやうな、何とはなしにしんみりさせられる句である。

○

〔二八九〕 大根引大根で道を教へけり（發句集）

「下新田の杢兵衛さんがとこかね。そりやあなア、こりよ眞ッ直に行つてあの森をつッこ抜けて、それあすこに寺の屋根が見えてるだんべえ。あの寺について斯う曲つて行かつせえ。」

今引抜いた大根をふり上げながら、聲高に語る一人の頑丈な人物。一つの情景が、フキルムのやうに腦裡に展開して來る。一體、大根引といふものは、他の農事に比して非常に親しい感じのするものである。荒涼たる冬の野面に點出する人間の勞力が、特に鮮かに印象されるためであらう。質朴な田園の風趣に親しまされる。廣く愛誦されてよい句である。

○

〔二九〇〕 鳴く雀その大根も今引くぞ（發句集）

澄渡つた冬空の下に、大根畠に下りて囀り交して居る雀。順繰り〳〵に、力を籠めて大根を引いて行く男。その動作を第三者から見て、「それ〳〵お前のところももう直きあぶないぞ」と、雀に對して警告を與へる氣持ちと解する時に、この句は非常に手固く、情景が鮮明になつて來る。次に、大根引く男その者が雀に呼びかけたとすると、一句の調子はグッと碎けて輕い味となる。尤も「今引くぞ」は主觀的用語には違ひないが、私は大體初めの解に做つて、つまり大根引く男の動作の中に作者の主觀の移入されたものと見ることが穩かであらうと思ふ。冬枯の野面に點ぜられた大根の葉の青さと、人と雀との渾然とした小天地が描かれて居る。

○

〔二九一〕 大根引く拍子にころり小僧かな（おらが春）

私はこの句を見ると、何となく一茶の藝術境の危うさを見せつけられるやうな氣がする。若しもこの作者に今十年の齡を貸したら、或ひは斯んな調子に墮して行つたのではなかつたらうか。一茶の晩年は既に行く處に行きついて多少行詰つて居たかの觀がある。さればと云つて私は決して一茶を辱めようとするのではない。一人の人間が持つて居るだけの力を出し切るといふことは、それは容易な精進で至り着ける境地ではない。其點に於て、私は一茶の不亂の努力に對して或る羨みをこそ感ずれ、敬意を惜しまないつもりである。一茶は實にその特色も缺點もよく出し切つた作家であつたと思ふ。

○

〔二九二〕 行く人を皿で招くや藥喰（發句集）

「藥喰」の正しい意味は、寒中に鹿の肉を喰ふことである。昔の人は平常鹿の肉を喰ふことを忌んだ。加茂、春日の神使の故であらうか。たゞ寒中にこれを喰へば非常に養生になると云はれて居た。これと共に、冬季諸獣の肉を喰ふことも亦藥喰と稱へられたもので、佛教徒の遠慮の見えるゆかしい言葉だと思ふ。

肉の鍋がくた〳〵煮上つて居るところへ、恰度懇意な人が通りかゝつた。「あつ恰度よいところだ。寄つて行かつせえ。」といふ調子で、手に持つて居た皿を上げて「オイ〳〵」と招き返す。刹那の一寸慌てた様が、面白く懷しく叙されて居る。道路に面して縁側があり炬燵のある彼の郷里の方の家作りや、細長い町の様も聯想に入つて來る。親しみ深い句である。

○

〔二九三〕 ふぐ喰はぬ人には見せな富士の山（一代全集）

河豚の或物には激毒を有して屢々人命を落すことは人の知る如くであるが、食道樂を標榜する江戸人は進んでその味を賞玩して心意氣を見せた。一茶も大分河豚を詠んで居るが、五十にして云々といふ句もあつて、臆病な一茶は五十位になつてからやつと味を知つたのだらうと思ふ。それだけに大自慢で、ふぐの味を知らぬ奴などは共に談ずるに足らぬと云つた調子で、富士山を引合に出して昂然と意氣を擧げて居るところは、いかにも子供ッぽい、單純な一茶の面目が躍如として居る。

○

〔二九四〕 長閑さや煤はいた夜の小行燈（句帳）

夏の部「涼しさや糊のかわかぬ小行燈」と非常によく似て居るが、これは各々に獨立した氣分を持つて居て、決して類句とは云へない。

一體行燈といふものゝ情趣を、これからの人達は知ることが出來なくなるのであらうが、行燈の灯影はまことにおつとりとしたいゝものである。

さつぱりと煤はいた夜は、我家ながら常よりも小廣く見える座敷にチョコナンと行燈を燈して、扨ゆつたりとくつろいで見た感じである。「長閑」は、それだけで春の季題に扱はれて居る位で、散文に

使はれてあるよりも重い意味がある。煤もはき終へて、既に春に隣する稍々華やいだ氣分を說明して居る。今のやうに春秋二季の大掃除のなかつた頃は、東京あたりでも煤拂ひは年末行事の一つであつた。

小行燈の「小」には大した意味はない。語呂と、感じの上の懷しさから來て居る。

○

〔二九五〕お仲間に猫も坐とるや年忘れ（記帳）

人間並の顏をして猫の坐つて居るのも可笑しいが、猫一疋を點じて、年忘れの親しげな小宴の氣分を叙してあることは更に珍とするに足りる。理窟なしに面白い句であるが、たゞ、一木一草と雖も作者の愛の中に溶されない限りは作者のものとはならないといふことが、この猫の場合にも云はれると思ふ。「こん畜生ッ　邪魔な奴だ。」と蹴飛ばす人の心には猫は存在しない。

○

〔二九六〕獨身や上野歩いて年忘れ（七番日記）

年忘れの宴を張る煩ひもなく、半世捨人のやうな人間にかまひ手もない忙しい世間を他所に、上野あたりの冬枯れの木立の間をぼつ〳〵と歩きながら、行年の氣分に浸つて居る閑寂な心境を、嫌味なく、思はせぶりなところもなく素直に叙してあるところがよい。

非常に呑氣な氣分ではあるが、然し、年の暮ながら所在なさに上野邊でもぶらついて見ようとする氣持。それを敢て世間的の年忘れと名付けて居るところに、泌々とした孤獨感が流れて居ると思ふ。尤も、作者はそれを云はうとして居るのではない。作者は寧ろ、意識してやる世間並はづれの行動に興じて居るのであらうが、私にはやはりその心持の裡を流れる仄かな淋しさが感ぜられてならない。

○

〔二九七〕はつかしやまかり出てとる江戸の年（おらが春）

年代は今はつきりしないが、一茶が一旦故郷に引退してから、又江戸に出て越年する折の感想である。前書に「かも川をわたらじとちかひし人さへあるに、ひと度籠りし深山を下りてしら髮つむりを吹れつゝ名利の地に交る」とある。

この前書の意は、石川丈山が後水尾天皇に召された折、

わたらじな瀬見の小川の淺くとも
老の波たつかげははづかし

この歌を上つて、誓つて鴨川を渡らぬ由を申上げて辭したといふ故事に據るもので、深い意味はない。久振りで舊知の中に交る田舍者の晴がましさであらう。

○

〔二九八〕お袋がお福手ちぎる指南かな（おらが春）

私はこの著作に着手した最初に、手近にある活版本に依つて「おらが春」の句を選んで居た。そして「お袋がお福ねぢきる指南かな」とあるお福といふ方言が判らなかつた爲めに、現今信州へ歸住されて居る伊藤松宇翁に教示を乞うたのであつた。然るに翁の返書に依つて意外な間違ひが明かにされた。

「お福ねぢきる」は校訂の際、手の草書と年の眞假名とを見誤つたもので「お福手ちぎる」がほんとうであつた。そして、お福手は正月のお飾り餅のことであつた。越谷吾山といふ安永頃の俳人の殘した物類稱呼といふ書にも「かゞみ餅諸國の通稱なり。まどかなる形によるの名なりとかや、東國にてそなへと呼び、又ふくでんとも云ふ。越後及び信濃にてふくでと云ふ。」とある。

年に一度の鏡餅を作ることは、家々の格式にも依り、代々傳はる仕來り等もあつて、年中行事の中では可なり重要な意味を持つて居る。一家の主婦である母親が、若い者を前に置いて、おそなへの大さに相當する餅の分量をねぢきつて見せて居る樣である。「お袋」といふ極めてくだけた呼び方に、「指南」といふ鹿爪らしい言葉を配したところに自然の可笑味がある。然し、これと一寸似た行き方をした句に「鬼灯の口つきを姉の指南かな」といふのもあるが、事柄が事柄だけに、お福手の方にずんと眞實味がある。

この句は大ていの校訂本に「お福ねぢきる」となつて居るやうであるから、特に注意しておく。

○

〔二九九〕ぽつつけて餅に書くなり何貫目（句帳）

一方では竈の火が紅々と燃えて、蒸籠から盛んに湯氣が上つて居る。一方では鉢卷した若者がぽんぽん杵を打ち下して居る。板間の方では女達交りに既にのし上つた餅を秤にかけて、何貫目とぶつつけに書いて片隅へ押やつておく。二三軒最合ひで節餅をつくやうな場合にでも接する情景で

あらう。

忙しげな放膽な動作を一つ摘出して、年中行事の賑かな氣分を彷彿させることは殆ど類型的の一茶の手法であるが、眼前の見つけ處を何の顧慮なくぐん〳〵と押して行く態度は壯快である。

○

〔三〇〇〕神の灯や餅を定木に餅を切る（發句集）

神棚の灯の華やかに灯る歳末の一間の内の賑々しさが、ホンのつまらない餅切の描寫に依つて、宛らに浮んで來る。初めに切つた餅を手本として切り進めて行くことは、私達がいつもやつて居ることであるが、前の句と云ひ、この句と云ひ、眼を止めて見れば、吾々の周圍はこんなにも華やかに、吾々を俟つ感興に滿ちて居る世界だといふことを敎へられる。

○

〔三〇一〕そのあとは子供の聲や鬼やらひ（おらが春）

「福は内。（禍）は内。鬼はそとッ。」

突然だみ聲が皮切りをして、バラ〳〵と豆を打つ音。聲と共にピシリと戸が閉まる。續いて町内のあちらにもこちらにも……そして、そのあとを受けて一しきり「福は内。福は内。」と、賑やかに連呼するのは子供の聲である。靜かに華やいだ節分の夜の氣分が、聽覺を通してまざ〳〵と電波されて來る。さしづめこれはラヂオ物である。

○

〔三〇二〕下戸の立つたる藏もなし年の暮（文通）

「好酒一樽ありがたく朝暮たのしみ申候

下戸の立つたる藏もなし年の暮　一茶」

などゝへらず口を

といふ書簡が殘されて居る。

この他二三の句及び斷片に依つて、一茶が酒も嗜んだことは察せられるが、この書簡に依つて一層動かし難い證左が擧つて居る譯である。

新内の一口唄（ヒトクチウタ）に

おしるこの　下戸の立てたる藏はない。新川新堀かやば町　みんな上戸の立てた藏。

この歌詞は極く普通に唄はれて居たものらしく、今も猶古い人達の間に殘つて居る。

小唄の文句そのまゝに、年の暮も何のそのと、昂然と肘を曲げた一茶の陶醉境である。實に堪らないほと混濁した世界に生涯を任せて居た一茶も、時にこの醉境に遊び得たことは、彼のために心から祝福したくなる。蓋し上戸のために氣を吐いた一句ではある。

餅やぼた餅ばかりでやゝ食傷氣味のところへ、敢てこの一句を選して、左黨のために捧げておく。

雜の部

○

〔三〇三〕月花や四十九年の無駄歩き（七番日記）

ほんの輕い言捨てとも思はれるが、私はやはりこの句の裡には一筋の秋風のやうなものが吹拔けて居ると思ふ。

人間の世の中の何が無駄でないであらう。無駄と云へば何も彼も無駄なのだ。どれほどの發明も、どれほどの富も、どれほどの創作も、悠々たる宇宙から見れば何といふ小さな何といふ賴りない人間業であらう。人はたゞ目前に轉がされた美しい球を追ふやうな氣持ちで、或ひは、押され曳かれる力に引かれて、何物の意志とも知れない各々の生活を生活して居る。然し、美しい球の行衞をふと見失ふ時、押され曳かれる力のゆるんだ時、人は自分の生活の目標を見失ひ、若しくば疑つて來る。日夜

自己の藝術に執して、矻々として生涯に數萬句を吐いて居る一茶も、時にこの虚無の境地に目醒めて居る。

○

〔三〇四〕おのづから頭が下るなり神路山（發句集）

何事のおはしますかは知らねども
　忝けなさに涙こぼるゝ

神韻渺々たる神路山を詠じた西行の歌の俳諧のやうなものであるが、この率直な感情の表出が、和歌と俳句との摑み所の差、といふよりも寧ろ、磨かれた玉のやうな歌人西行に對して、これは野人一茶の素朴さが見えて居て、おのづとほゝゑまされる。然もこの敬虔な童心の前に、期せずして自分も頭の下る心地がする。

○

〔三〇五〕松陰に寢て喰ふ六十餘州哉（七番日記）

「天下泰平」「祝治世」等の前書が附されて居る。

小高い丘邊の松の大木を中心として、眠れる如き沃野の見渡しを思はせる悠大な句である。然も「寢て喰ふ」に、飄逸な特調を失つて居ない。寢て暮す、卽ち六十餘州の民草が樂に生活して居るの意であらう。

彼の鄕里柏原の諏訪神社には、この句を刻んだ句碑が建てられて居る。この句は彼の代表作として決して恥しいものでなく、一茶も得意として居た作らしいが、たゞ山間の一驛たる彼の鄕里に殘す句碑としては、御代の謳歌にのみ囚はれず、今少し鄕土色を斟酌して選句して貰ひたかつたやうに思ふ。先人の殘した仕事を非難するではないが、例へば「おらが世やそこらの草も餅になる」なぞの方が、より眞實に一茶の面影を傳へて居ると思ふ。

遺著の部

おらが春

昔丹後の國普甲寺といふ所に深く淨土を願ふ上人ありけり、年の始めは世間祝ひをしてざざめけば、われもせんとて大晦日の夜ひとり使ふ小法師に手紙したゝめ渡して、翌の曉にしか〳〵せよと、きと云ひ敎へて本堂へ泊りにやりぬ。小法師は元日の旦いまだ隅々は小暗きに、初雞の聲と同じくがばと起きて、敎への如く表門を丁々と敲けば、內よりいづこよりと問ふ時、西方彌陀佛より年始の使僧に候と答ふるより早く、上人裸足にて踊り出で、門の扉を左右へさつと開きて小法師を上座に請じて、きのふの手紙をとりて恭しく戴きて讀みて曰く、それ世界は衆苦充滿に候間早くわが國に來るべし、聖衆出迎ひして待ち入候、と讀み終りて應々と泣かれけるとかや。此の上人みづからたくみ拵へたる悲しみにみづから嘆きつゝ、初春の淨衣を絞りてしたゝる涙を見て祝ふとは、ものに狂ふ樣ながら、俗人に對して無常を演ぶるを禮とすると聞くからに、佛門に於ては祝の骨張なるべけれ。それとはいさゝか替りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境涯ながら、鶴龜にたぐへての祝ひ盡しも厄拂ひの口上めきてそら〳〵しく思ふからに、から風の吹けば飛ぶ屑家は屑家のあるべきやうに、門松立てず煤

掃かず・雪の山路の曲りなりに今年の春もあなた任せになん迎へける。

日出度さも中位なりおらが春

去年の五月生れたる娘に一人前の雑煮膳を据ゑて

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

文政二年正月一日

年男勤むべき僕といふ者もあらざれば

名代に若水浴びる烏かな

水江春色

すつぽんも時や作らん春の月

山の月花盗人を照したまふ

善光寺堂前

灰猫のやうな柳もお花かな

さくら〳〵と唄はれし老木かな

櫻へと見えてじん〳〵端折かな

初午

花の世を無官の狐鳴きにけり

かくれ家や猫にも据ゑる二日灸

葬からあんな胡蝶の生れけり

上野遠望

白壁の誹られながら霞みけり

苗代は庵のかざりに青みけり

花の陰あかの他人はなかりけり

二月十五日

小うるさい花が咲くとて寢釋迦かな

御佛や寢て在しても花と錢

猫の子や秤にかゝりつゝじやれる

玉川

晒し布霞のたしに登えけり

妙專寺の阿子法師鷹丸とて、今年十一になりけるが、三月七日の空うら〳〵と霞めるにめでゝ、觀了といふふとくたくましき荒法師を具して、荒井坂といふ處にまかりて芹薺など摘みて遊ぶ折柄、飯綱嵐の雪解水黑けぶり立てゝだら〳〵と鳴りわたりて押し來りしに、いかゞしたりけん、橋を踏み外してだぶりと落ちたり。やあれ觀了、たのむ〳〵と呼ばはりて、爰に頭出づると見ればかしこに手を出しつゝ、忽ち其の聲も蚊の鳴くやうに遠ざかると見るを此の世の名殘として、痛ましいかな、逆卷く波に捲き込まれて影も容も見えざりけり。あはやと村の人々打群がりて、炬をかゝげてあちこち搜しけるに、一里ばかり川下の岩にはさまりてありけるを、とりあげてさま〴〵介抱しけるに、空しき袂より路の臺三つ四つ零れ出でたるを見るにつけても、いつもの如くいそ〳〵歸りて家内への土產の料に採りしものならんと思ひやられて、鬼をひしぐ山人も皆々袖をぞ絞りける。とみに駕に乘せて、初夜過ぐる頃寺に舁き入れぬ。父母は今や遲しと駈け寄りて、一目見るよりよゝ〳〵と人目も恥ぢず大聲に泣きころびぬ。日頃人に無常を勸むる境涯も、其の身になりては、さすが恩愛のきづなに心の結び目ほどけぬるはことわりなりける。且には笑ひはやして門出したるを、夕には物いはぬ屍となりて戻る。目もあてられぬ有樣にぞありける。然るに九日野送りなれば、おのれも棺の供につらなりぬ。

思ひきや下萠いそぐ若草を野邊のけふりになしてみむとは

ながゝの月日、雪の下に忍びたる蕗蒲公英のたぐひ、やをら春吹く風の時を得て雪間々々を嬉しげに首さしのべて、此の世の明り見るや否や、ほつりと摘み切らるゝ草の身になりなば、鷹丸法師の親の如く悲しまざらめや。草木國土悉皆成佛とかや。かれらも佛性得たるものになん。

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙かな
梅の花こゝを盜めとさす月か
松島の小隅は暮れて鳴く雲雀
大猫の尻尾でなぶる小蝶かな

三月十七日保科詣

花散るやとある木陰も小開帳
通り抜けせよと垣から柳かな
餅腹をこなしがてらの接穂かな

正月元日の夜の丑の刻よりはじまりて、打つゞき八日目々々々に天に音樂あるといふ事、誰言ふと

もなく言ひ觸らして、いつ〳〵の夜そんぜうそこにてしかと即きしといふ人もあり。また吹く風のあとなし事とけなす者もあり。其の噂東西南北にぱつと弘がりぬ。つら〳〵思ふに、全く有りと信じ難く、又ひたすら無しとかたつけ難し。天地不思議のなせるわざにて、いにしへ甘露を降らせ、乙女の天下りて舞ひしためしなきにしもあらず。今此の天下泰平に感じて天上の人も腹皷うち、俳優して樂しむならめ、それを聞き得ざるは其身の罪のほどに因るべし。何にまれ惡しからぬ取沙汰なりと、三月十九日夕過ぎより誰れ彼れ我が庵につどひて、おの〳〵息をこらして今や〳〵と待つうち夜はしら〳〵明けて窓の梅の木に一聲あり。

今の世も鳥は法華經啼きにけり

鶯の馳走に掃きし垣根かな
馬までも旅籠泊りや春の雨
雀の子そこのけ〳〵お馬が通る
霞む日やしんかんとして大座敷
横乘の馬のつゞくや夕雲雀

京　島　原

入口の愛想になびく柳かな
藪村やまぐれあたりも梅の花
正月や夜はよるとて梅の月
茶屋村の一夜に湧きし櫻かな
あす〳〵と待たるゝうちが櫻かな

白　飛

慰みに藁を打つなり夏の月

四月八日

ながの日を乾く間もなし誕生佛
五月雨も中休みかよ今日は

病　後

塵の身と共にふは〳〵紙帳かな
五月雨も仕舞ひのはら〳〵かな
小座頭のあたまにかぶる扇かな
竹の子と品よくあそべ雀の子

入梅晴や二軒並んで煤拂ひ

谷藤橋

這ひわたる橋の下よりほとゝぎす
初瓜を引とらまへて寢た子かな

人形町

人形に茶を運ばせて門すゞみ
今までは罰もあたらず晝寢蚊帳
蚊がちらりほらり是から老が世ぞ
世がよくばも一つとまれ飯の蠅
卯の花に一人きりの社かな

幽栖

蠶にまで尺とられけり此の柱
身一つすぐすとて山家のやもめの哀さは
おのが里仕舞つてどこへ田植笠
あつぱれの大若竹ぞ見ぬうちに

花摘むや扇をちよいとぽんのくぼ
年寄と見るや鳴く蚊の耳のそば

戸隱山

据風呂へ流し込んだる清水かな
此の入りはどなたの庵ぞ苔清水
一つ蚊のだまつてしくり〳〵かな
その門にあたま用心衣更
かくれ家の柱で麥を打たれけり

越後女旅かけて商ひする哀れさを

麥秋や子を負ひながら鰯賣
笋よ人の子なくば花さかん
芝でした休み所や夏木立
山苔も花さく世話はもちにけり
ぽうふりの天上したり三日の月

獨樂坊

寢所見る程は卯の花明りかな

法の山や蛇も浮世を捨衣

今年みちのくの方修行せんと、乞食袋首かけて小風呂敷背中に負ひたれば、影法師はさなから西行らしく見えて殊勝なるに、心は雪と墨染の袖と思へば〳〵入梅晴のそらけづかしきに、今更姿變へるもむつかしく、卯の花月十六日といふ日、久しく寢馴れたる庵をうしろになして二三里も歩みし頃、細杖をつく〳〵思ふに、おのれ既に六十の坂登りつめたれば、一期の月も西山に傾く命、またながらへて歸らんことも白川の關をはる〳〵越ゆる身なれば、十府の菅菰の十に一つも覺束なしと案じつゞくる程に、ほとんど心細くて、家々の雞の時を告る聲も、とつてかへせと呼ぶやうに聞え、はたけはたけの麥に風のそよ吹くも、誰ぞ招く如く覺えて、行く道もしきりに進まざれば、とある木陰に休らひて痩脛さすりつゝ詠むるに、柏原はあの山の外、雲のかゝれる下あたりなどおしはかられて、何となく名殘惜しさに

思ふまじ見まじとすれど我が家かな

おなじ心を

ふるさとに花もあらねど踏む足の

あとへ心を引く霞かな

あまひらを驚かさじと青麥に

程よき風の吹きすぐるかな

日々懈怠不惜ニ寸陰一

今日の日も棒ふり蟲よあすも亦

無限欲有限命

此の風に不足いふなり夏座敷

起き〳〵の欲日引張る青田かな

心に思ふことを

古郷は蠅まで人をさしにけり

直き世や小錢ほどでも蓮の花

松陰や寢蓙一つの夏座敷

題　童　唄

三度搔いて蜻蛉とまるや夏座敷

片息になつて逃入る螢かな

希　杖

夕顔の花で涙かむおばゞかな
暑いとて面で手習した子かな
大螢ゆらり〳〵と通りけり

田中河原如意湯に晝浴みして

なを暑し今來た山を寢て見れば
なむあみだ佛の方より鳴く蚊かな
飛べよ蚤同じ事なら蓮の上
かくれ家は蠅も小勢で暮しけり
最戻鵜はまたもから身で浮びけり
松の蟬どこまで鳴いて晝になる
今までは罰もあたらず晝寢蚊屋
離れ鵜が子の泣く船に戻りけり

わが友魚淵といふ人の所に、天が下にたぐひなき牡丹咲きたりとて、云ひつぎ聞き傳へて界隈は更なり、よそ國の人も足を勞してわざ〳〵見に來る者日々多かりき。おのれも今日通りがけに立寄り侍

りけるに、五間ばかりに花園をしつらへ、雨覆ひの蔀など今樣めかして凜々しく、白紅紫、花のさま隙間もなく開き揃ひたり。其の中に黑と黃なるは云ひしに違はず目を驚かすほど珍しく妙なるが、心を靜めて再び花の有樣を思ふに、ばさ〳〵として何となく見すぼらしく、外の花にたくらぶれば、今を盛りの手弱女の側にむなしき屍を粧ひ立て並べ置きたるやうにてさら〳〵色艶なし。是れ主人のわざくれに紙もて作りて、葉がくれにくゝりつけて人を化かすにぞありける。されど腰掛臺の價を貪るためにもあらで、たゞ日々の群集に酒茶費して樂しむ主の心思ひやられて、しきりにをかしくなん。

紙屑も牡丹顔ぞよ葉がくれに

蛙の野送

こゝらの子供の戲れに、蛙を生ながら土に埋めて諷うて曰く、ひきどのゝお死なつた。おんばく持つてとぶらひに〳〵〳〵と、口々に囃して、おほばこの葉を彼のうづめたる上に打かぶせて歸りぬ。然るに本草綱目、車前車の異名を蝦蟇衣といふ。此の國の俗「がいろつ葉」と呼ぶ。おのづからに和漢心を同じくすといふべし。昔はかばかりのざれごとさへ謂れあるにや。

卯の花もほろり〳〵や蟇の塚

此もの諸越の仙人に飛行自在の術を敎へ、我が朝天王寺には大戰ひにゆゝしき武名を殘しき。それは昔々の事にして、今此の治まれる御代に隨ひ共に和らぎつゝ、夏の夕暮背戸に筵を廣げて福よ〳〵と呼べば、やがて隅の藪よりのさ〳〵這ひ寄りて人と同じく凉む。其の面魂一句言ひたげにぞありける。さるものから長嘯子の蟲合に歌の判者に選ばれしは、汝が生涯のほまれなるべし。

悠然として山を見る蛙かな　其角

鶯にまかり出でたよひきがへる

思ふことだまつてゐるかひきがへる　曲翠

一雫天窓なでけりひきがへる

そんじよそこゝと青田のひいき哉

闇の蚊のぶんとばかりに燒かれけり

鵜の眞似は鵜より上手な子供かな

寢ならんで遠夕立の評議かな

留守中も釣り放しなる紙帳かな

山番の爺が祈りし清水かな

蓮の葉に此の世の露は曲りけり

狗にこゝへ來よとや蟬の聲

五月二十八日

虎が雨など輕んじて濡れにけり

信濃の國墨坂といふ所に中村何がしといふ醫師ありけり。其の父のわざくれに蛇のつるみたるを打殺したりけるが、其の夜かくれ所の物づき〳〵痛み出して、ついに腐れてころりと落ちて死にけるとかや。其の子親の業をつぎて三哲といふ。なみ〳〵より勝れてふとくたくましき○○のやうなるものもちたりけり。然るに妻を迎へて始て交りせんとする時○○○○○○○○やうなるもの、直ちにめそ〳〵と小さく、燈心に等しくふは〳〵として今更にふつと○○○○ものから、恥かしくもどかしくいま〳〵しく、婦人を替へたらましかば又幸あらんと、百人ばかりも取替へ引替へ妾を抱へぬれど、皆々前の通りなれば、狂氣の如く唯いらちにいらちて今は獨身にて暮しけり。かゝること宇治拾遺物語其外昔双紙などにばかりと思ひ捨て侍りけるを、今日の前に見んとは是かの蛇の執念に其の家血筋絶やすならんと、人々ひそかに囁きけり。されば生きとし生けるもの、蚤虱に至るまで命惜しき

は人に同じからん。ましてつるみたるを殺すは罪深きわざなるべし。

魚どもや桶とも知らで門涼み　大江丸

とく霞めとく〳〵霞め放ち鳥　光俊卿

彼岸の蚊釋迦の眞似して喰はれけり　俊頼卿

水舟に浮きて鰭ふる生け鯉の
命待つ間もせはしなの世や

ふしつけしおどろが下に住むはへの
心幼き身をいかにせん

淺間山

畫顔やぽつぽと燃える石ころへ

俳諧宗雲水に送る

鬼茨も添へて見よ〳〵一すゞみ

古之爲レ關也。將ニ以テ禦ヒ暴。今之爲レ關也。將ニ以テ爲ヒ暴。

關守の灸點はやる梅の花

人聲に子を引かくす女鹿かな

初螢其の手は喰はぬ飛びぶりや

蓮の花少し曲るもうき世かな

界隈の怠け所や木下闇　大沼

萍の花から乘らんあの雲へ　越後

柿崎やしぶ〳〵鳴きの閑古鳥　江戸住居

青草も錢だけ戰ぐ門涼み

撫子に二文が水を浴せけり

小金原

母馬が番して飲ます清水かな

風あるを以て尊し雲の峰

疫病神蚤も負はせて流しけり

茂林寺

蝶々のふはりととんだ茶釜かな

櫻までわるく言はする藪蚊かな

蟻の道雲の峰よりつゞきけん

高井郡六川郷六川の里、山の神の森にて栗三つ拾ひ來りて庭の小隅に埋め置きたりしに、つや〳〵と芽を出して嬉しげなりけるを、東鄰にて家に家を造り足しぬるからに、月日の惠みとゞかず雨露の潤ひうとければ、其の年やをら一尺ばかり伸びけり。然るを此の國のならひ、冬になれば東より西より南より北より家の大雪をひた落しに落し込むからに、恰も越の白山一夜に兀と湧き出たるにひとしく、其の山に薪水を運ぶ道を作るに愛宕山の石壇登るが如し。漸く二三月頃おしなべて長閑なるに、

鄰々の背戸畑は草木青みわたりて花もまれ〳〵咲きけるに、かの山はいまだ眞白妙に風冴えて嚴寒を欺く景色とて、やゝ卯月八日髮さけ蟲の歌を圃に張る頃、山鶯の折知り顏に啼けば、雪の消え口より見るに、哀れなるかな、栗の木末は根際よりほきりと折れてしまひぬ。人ならば、直ちに無常のけぶりと立昇るべきを、古根よりそろ〳〵青葉吹いて辛うじて一尺ばかり伸びけるを、また前の如く家の雪を落し込まれてほきりと折れ、年々折れ〳〵て今年七年の星霜を累ぬれど、花咲き實入る力なく、されど此の世の緣盡きざれば枯れも果てずして、生涯一尺程にて生きてゐるといふばかりなるべし。われ亦さの通り、梅の魁に生れながら茨の遲生えに地をせばめられつゝ、鬼婆山の山颪に吹き折られ折られて、晴れ〳〵しき世界に芽を出だす日は一日も無く、今年五十七年、露の玉の緒の今まで切れざるも不思議なり。然るにおのれが不運を科なき草木に及ぼすことの不便なりけり。

撫子やまゝはゝ木々の日陰花

さるべき因緣ならんと思へば苦しみも平生とはなりぬ。

朝夕に覆ひかぶさりし目の上の

辛夷も花の盛りなりけり

其引

子ばかりの蒲團に蘆の穗綿かな

宗鑑

竹の雪はらふは風のまゝ子かな　正勝
美しきまゝ子の顔の蠅うたん　紅雪
咲けとて蚊さへ寢させぬまゝ子かな　未達

（貞享四丁卯歌仙）

葛の縄目をゆるされし文　芭蕉
まゝ子をもいたはる嫁の名をとげて

（祇園拾遺）

下部ひそかに首埋めける　未達
まゝ母のまた口ばしる夜の雨

（おく五歌仙）

山木かくれて草に血をぬる　芭蕉
わづかなる世をまゝ母に僞られ　凡流

小さき土鍋のありけるをわが腹の子にとらせてとらせざりければ鶯の啼くを聞きて詠めるとなん。

鶯よなとさはなきそ乳やほしき
小鍋やほしき母や戀しき　貫之娘

親のない子はどこでも知れる爪を咥へて門に立つ、と子供等に唄はるゝも心細く、大方の人交りもせずして裏の畠に木萱など積みたる片陰に蹋りて永の日を暮しぬ。わが身ながらも哀れなりけり。

われと來て遊べや親のない雀　六歳　彌太郎

昔大和の國立田村にむくつけき女ありて、まゝ子の喉を十日ほどほしてより、飯を一椀見せびらかして言ふやう、之をあの石地藏のたべたらんには汝にも取らせんとあるに、まゝ子はひだるさ堪へがたく、石佛の袖に縋りてしか〳〵願ひけるに、不思議やな、石佛大口あきてむし〳〵喰ひたまふに、さすがのまゝ母の角もほつきり折れて、それより我が生める子と隔てなくはごくみけるとなん。その地藏菩薩今に在りて折々の供物絶えざりけり。

ぼた餅や藪の佛も春の風

こぞの夏竹植うる日の頃、うき節しげき浮世に生れたる娘、愚かにしてものにさとかれとて名をさと〻呼ぶ。今年誕生日祝ふころほひより、てうちあは〻、おつもてん〳〵、かぶり〳〵振りながら、同じ子供の風車といふもの持てるをしきりに欲しがりてむづかれば、とみにとらせけるを、やがてむしやむしや破つて捨て、露ほどの執念なく、すぐに外のものに心うつりてそこらにある茶碗を打破りつ〻、

それも直ちに倦みて障子の薄紙をめり〳〵むしるに、よくした〳〵とほむれば、誠と思ひきやらと笑ひてひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく名月のきら〳〵しく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうになか〳〵心の皺を伸ばしぬ。又人の來りてわん〳〵は何處にといへば犬に指さし、かあ〳〵はと問へば鳥に指さすさま、口許より爪先まで愛嬌こぼれて愛らしく、いはゞ春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺え侍る。このおさな、佛の守りしたまひけん、逮夜の夕暮に持佛堂に蠟燭照らして鈴うち鳴らせば、どこに居てもいそがしく這ひよりて、早蕨の小さき手を合せてなんむ〳〵と唱ふ聲、しほらしく床しくなつかしく殊勝なり。それにつけてもおのれ頭にはいくらの霜を戴き、額にはしは〴〵波の寄せ來る齡にて、彌陀頼むすべも知らでうか〳〵月日を費すこそ、二つ子の手前も恥かしけれと思ふも、其の座を退けばはや地獄の種を蒔いて膝に群る蠅を憎み、膳をめぐる蚊をそしりつゝ、あまつさへ佛の戒めし酒を呑む、(是より見るにつけつゝ迄小兒のさま)折から門に月さしていと凉しく、外にわらはべの踊の聲のすれば、直ちに小椀投げ捨て片いざりにいざり出て、聲を揚げ手眞似して嬉しげなるを見るにつけつゝ、いつしか彼をも振分髪のたけになして踊らせて見たらんには、二十五菩薩の管絃よりも遙かまさりて興あるわざならんと、わが身につもる老を忘れて憂さをなんはらしける。かく日すがら、男鹿の角の束の間も手足を動かさずといふ事なくて遊び疲れるものから、朝は日のたけるまで眠る、そのうちばかり母は正月と思ひ、飯炊きそこら掃き片付けて、團

扇ひら〳〵汗をさまして、閨に泣聲のするを眼の覺むる相圖と定め手かしこく抱き起して、裏の畠に尿やりて乳房あてがへば、すは〳〵吸ひながら胸板のあたりを打ちたゝきてにこ〳〵笑ひ顔をつくるに、母は長々胎内の苦しみも、日々襁褓の穢らはしきもほと〳〵忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに撫でさすりて、一入喜ぶ有樣なりけらし。

蛋の迹數へながらに添乳かな

より〳〵思ひ寄せたる小兒をも遊び連れにもとこゝに集めぬ。

柳からもゝんぐあゝゝと出る子かな

蓬萊になんむ〳〵といふ子かな

年問へば片手出す子や更衣

小兒の行末を祝して

頼もしやてんつるてんの初袷

名月を取てくれろと泣く子かな

子寶がきやら〳〵笑ふ榾火かな

阿子が餅〳〵とて竝べけり

妹が子の脊負うた形や配餅

餅花の木影にてうちあはゝかな　貞徳
凉風の吹く木へ縛る我が子かな
わんぱくや縛られながら呼ぶ螢

其引

あゝ立つたひとり立つたる今年かな　芭蕉
子に飽くと申す人には花もなし　子堂
袴着や子の草履とる親心　羅香
花といへも一つ云へや小さい子　東來
春雨や格子より出す童の手　葉捨
早乙女や子の泣く方へ植ゑて行く　其角
折るとても花の木の間の伜かな　其角

箸とりそめたる日

鵑啼くや赤子の頬を吸ふ時に　其角
男に嫌はれて親の許に住みけるに、おのが子の初節句見たくも、晝は人目しげゝれば
去られたる門を夜見る幟かな　讀女不知

子を思ふ實情さもと聞えて哀れなり。猛き武士の心を和らぐるとはかゝる眞心をいふなるべし。いかなる鬼男なりとも、風の便りにも聞きなばいかでか再び呼び返さゞらめや。

所有畜類是世々親族となん。親を慕ひ子を慈む情、何ぞへだてのあるべきや。

人の親の烏追ひけり雀の子　鬼貫
夏山や子にあらはれて鹿の鳴く　五明
負うて出て子にも鳴かする蛙かな　東陽
鹿の親笹吹く風に戻りけり
小夜時雨なくは子の無い鹿にかな
子をかくす藪の廻りや啼く雲雀

樂しみ極りて愁ひ起るは浮世のならひなれど、いまだ樂しみも半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなるみどり子を、寢耳に水の押し來る如きあら〳〵しき痘の神に見込まれつゝ、いま水膿のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしをれたるに等しく、側に見る目さへ苦しげにぞありける。これも二三日經たれば痘はかせぐちにて、雪解の峽土のほろ〳〵落つるやうに瘡蓋といふもの取れば、祝ひ囃してさんだら法師といふを作りて、笹湯浴びせる眞似かたして、神は送り出したれど

ます〳〵弱りて、きのふより今日は頼み少なく、終に六月二十一日の朝顔の花と共に此の世をしぼみぬ。母は死顔にすがりてよゝ〳〵と泣くもむべなるかな。この期に及んでは行く水の再び歸らず、散る花の梢に戻らぬ悔いごとなどゝ、あきらめ顔しても思ひきりがたきは恩愛のきづなりけり。

露の世は露の世ながらさりながら

去る四月十六日みちのくにまからんと善光寺まで歩みけるを障る事ありて止みぬるも、かゝる不幸あらんとて道祖神のとゞめたまふならん。

其　　引

子におくれたる頃

似た顔もあらば出て見ん一をどり　落梧

母におくれたる子の哀れさに　尙白

幼子やひとり飯食ふ秋の暮

娘を葬りける夜

夜の鶴土に蒲團も着せられず　其角

孫娘におくれて三月三日野外に遊ぶ

宿を出て雛忘れば桃の花　猿雖

娘みまかりけるに

十六夜やわが身に知れと月の缺　杉風

猶子母にはなれし頃

柄をなめて母尋るや塗團扇　來山

愛子を失ひて

春の夢氣の違はぬが恨めしい　同

子をうしなひて

蜻蛉釣り今日はどこまで行た事か　千代

やんごとなき人々の歌も心に浮ぶまゝにふとしるし侍りぬ。

讀人不知

あはれなり夜半に捨子の泣く聲は

母に添寢の夢や見つらん　爲家卿

捨てゝ行く親慕ふ子の片いざり

世に立ちかねて音こそなかるれ

人の親の心は闇にあらねども
　子を思ふゆゑに迷ひぬるかな

　　頌　曰

未レ攀レ歩時先已到
直饒著々在ニ機先一

未レ動レ舌時先説了
更須レ知レ有ニ向上竅一

　　兼輔卿

貫ふより早く失ふ扇かな
俄川とんで見せけり鹿の親
大寺や扇で知れし小僧の名

　曲者隠れて窺ふ圖

あはれ蚊のついと古井に忍びけり

　　大山詣

四五間の木太刀をかつぐ袷かな
太郎冠者まがひに通る扇かな

紫の里近きあたり、とある門に炭團ほどなる黑き巣鳥を捕りて籠伏せしてありけるに、その夜親鳥らしく夜すがら其の家の上に啼きける哀れさに、

子を思ふ闇やかはゆい〳〵と
　聲を鳥の啼きあかすらん

盗人おのが古郷に隠れて縛られしに、

業の鳥罠を巡るや村時雨

お成り場所に鳥どもの餌蒔を慕ふふびんさに、

人眠き鶴よどちらに箭が當る

箭の下に母の乳をのむ鹿の子かな　　立志

さすがの獵夫も髻切りしはかゝる折になんありける。

おのれ住める郷は奥信濃黒姫山のだら〳〵下りの小隅なれば、雪は夏消えて霜は秋降るものから、橋のからたちとなるのみならで萬木千草上々國より移し植うるに悉く變ぜざるはなかりけり。

九輪草　四五輪草で仕舞ひけり

鐘西八郎爲朝人礫うつ所に、

時鳥蠅蟲めらもよつく聞け

鹿の子や横にくはへし萩の花

老翁岩に腰かけて一軸を授くる圖に、

われ汝を待つこと久し時鳥

幽　栖

わが家に恰好鳥の鳴にけり

二三遍人をきよくつて行く螢

とぶ螢その手はくはぬ〳〵とや

成蹊子去年の冬終に不言人となりしとなん。鶯笠の許より此の頃申おこせたりしを、

津の國の何を申すも枯木立

白笠をすこしさますや木下陰

罷り出でたるは此の藪の墓にて候

雲を吐く口つきしたりひきがへる

赤い葉の榮耀に散るや夏木立

稲妻やひと切れづゝに世が直る

石川はくわらり稲妻さらりかな

夕霧や馬の覺えし橋の穴

秋風に歩いて逃る螢かな

二番休み

乳呑子の風よけに立つ案山子かな

連れにはぐれて

一人通ると壁に書く秋の暮

七月七日墓詣

一念佛申すだけしく芒かな

啄木鳥の止めて聞くかよ夕木魚

きつゝきが目利してゐる庵かな

經　堂

蟲の屁を指して笑ひ佛かな

得手ものゝ片足立や小田の雁

山寺や縁の上なる鹿の聲

下手笛によつく聞けとや鹿の聲

芋狩のから手で戻る騒ぎかな

さと女三十五日墓

秋風やむしりたがりし赤い花

棹鹿の喰ひこぼしけり萩の花

わがやうにどつさり寢たよ菊の花

のらくらが遊び加減の夜寒かな

露の玉つまんで見たるわらはかな

立寄らば大木の下とて大家には貧しき者の腰をかゞめておはむき云ふもことわりになん。こゝの諏訪の宮に大きさ牛を隱す栗の古木ありて、うち見たる所は菓一つもあらざりけるに、其の下をゆきゝする人日々とり得ざるはなかりけり。

十五夜は高井野梨本氏にありて、

古郷の留守居もひとり月見かな

月蝕皆既　亥、七剋、右方より缺、子六剋甚く、丑五剋、左終

人數は月より先へ缺けにけり

人の世は月もなやませたまひけり

潜上に月の缺けるを目利かな

酒盡きて眞の座につく月見かな

おのが味噌のみそ臭を知らず

蕎麥國の啖を切りつゝ月見かな

九月十六日正風院菊會

蹴下げて神農顏や菊の花

菊園や歩きながらの小盃

杖先で畫解きするなり菊の花

入道の大鉢卷で菊の花

下戸庵が疵なりこんな菊の花

さと女笑顏して夢に見えけるまゝを

頰べたに當てなどしたる眞瓜かな

どう追はれても人里を渡り鳥

山雀の輪拔けしながら渡りけり

鵯の聲堪忍袋きれたりな

蟷螂や五分の魂これ見よと

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる古鄕山

行燈を松に吊して小夜砧

行くな雁住めばどつちも秋の暮

若僧の扇面に

影法師に恥ぢよ夜寒の無駄歩き

こんな村なんとの行か渡り鳥

藪蔭や今年酒屋の今年酒

老　樂

予供等を心で拜む夜寒かな

蟀のとぶや唐箕の埃り先

小菊なら繩目の恥はなかるべし

戸まどひせし折からに

小便所こゝと馬よぶ夜寒かな

白飛士英

喧嘩すなあひみ互ひの渡り鳥

小男鹿やゑひしてなめる今朝の霜

狼は糞ばかりでも寒さかな

一つかみ塗樽拭ふ紅葉かな

むら千鳥そつと申せばはつと立つ

炭の火や朝の祝儀の咳ばらひ

三介が敲く木魚も時雨けり

木がらしやからよびされし按摩坊

善光寺門前憐乞食

重箱の錢四五文や夕時雨

大根引く拍子にころり小僧かな

初雪の降りすてゝある家尻かな

木がらしや折助歸る寒さ橋

菜畑を通して吳れる十夜かな

雪ちるやおどけも云へぬ信濃空

能なしは罪も亦なし冬ごもり

強盜はやりければ

張番に庵とられけり夜の霜

彼是といふも當座ぞ雪佛

お袋がお福手ちぎる指南かな

餅搗が隣りへ來たといふ子かな

餅　花

かまけるな柳の枝に餅がなる

子の眞似を親もするなり節季候

束に下らんとして中途まで出たるに

椋鳥と人に呼ばるゝ寒さかな

護持院原

木がらしや二十四文の遊女小屋

兩國橋

寒垢離に脊中の龍の披露かな

加茂川を渡らじと誓ひし人さへあるにひと度籠りし深山を下りて白髪つむりを吹かれつゝ名利の地に交る

はづかしや籠出てとる江戸の年

其のあとは子供の聲や鬼やらひ

小人閑居成不善

冬ごもり悪物喰ひを習ひけり

二十一日節分

一聲に此の世の鬼は逃げるよな

けふからは正月分ぞ麥の色

札納

梅の木や御祓箱を負ひながら

二十七日晴。坊守朝とく起きて飯を炊きける折から、東隣の園右衛門といふ者の餅搗なれば、例の通り來るべし、冷えてはあしかりなん、ほかほか湯けぶりの立つうち賞翫せよといふからに、今や〳〵

と待ちに待ちて、飯は氷の如く冷えて、餅は遂に來らずなりぬ。

わが門へ來さうにしたり配餅

他力信心々々と一向に他力に力を入れて頼み込み候輩は、遂に他力繩に縛られて自力地獄の焔の中へほたんと陥り候。其次にかゝるきたなき土凡夫をうつくしき黄金の膚になし下されと阿彌陀佛に押し詰へに詰へはなしにして置いて、はや五體は佛染みたるやうにわる濟ましなるも、自力の張本人たるべく候。問ひて曰く、如何やうに心得たらんには御流儀に叶ひ侍りなん。答へて曰く別に小むつかしき仔細は不存候。唯自力他力なんのかのいふあくたもくたをさらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は其の身を如來の御前に投げ出して、地獄なりとも極樂なりともあなた様の御はからひ次第遊ばされ下さりませと、お頼み申すばかりなり。斯くの如く決定しての上には、南無阿彌陀佛といふ口の下より、欲の網をはるの野に、手長鰕の行ひして人の目をかすめ、世渡る雁のかりそめにもわが田へ水を引く盗み心をゆめ〳〵持つべからず。然る時はあながち作り聲して念佛申すに及ばず。願はずとも佛は守りたまふべし。是れ即ち當流の安心とは申すなり。穴かしこ。

ともかくもあなたまかせの年の暮　五十七齢　一茶

文政二年十二月二十九日

おらが春 終

父終焉記

四月二十三日。晴。

いかなればかゝる淺ましき處にうつぶしたまふらんと抱き起しはべるに、いかなる惡日にやありけん、いさゝか心地なやましうとなんありけるに、急に發熱さかんにして、膚は火にさはるがごとくなれば、飯をすゝむれども一箸も喉に通らず、こはいかにとひとり驚き、魂を消すといへどもせんすべなく、只揉みさするより外はなかりけり。

二十四日。晴。

友がき竹葉のもとより、藥を貰うてすゝめけり。

二十五日。曇、晴。

病ひ日に〳〵おもりて、けさは重湯も通らず、只頼みとするは藥の一雫づゝ納まるのみなり。終日、

悶へ苦しみもがきたまふ。傍に附添ふ事のかなしびは、みづからなやむよりも思ひまさりて苦しかりき。

二十六日。晴。

野尻の里、迅碩を請待して診せしむるに、脈は内に沈みて所謂陰生の傷寒なれば、快氣も萬に一つなるべし、と頼もしげなくいはる。心も轉倒して、允に空しき舟に乘れるが如く、さてしも果てぬ事なれば、無理に藥をすゝめける。野尻の叔母泊る。

二十七日。雨。

いとゞさびしきに、雨の降りまさりて暮らしかぬるを、友がき竹葉の許より、かくなん。

五月雨あめとて空をかざすかな

二十八日。晴。

祖師の忌日なりとて、期夙く嗽ぎなどしたまふに、熱の障りにもやならんと止むれども、一向にとゞまりたまはず。御佛にむかひ、常の如く看經なしたまふに、御聲低う聞ゆるいかう衰へたまふ後姿、

心細くおぼゆ。

二十九日。

父は、病の重りたまふにつけて、孤の我身の行末を案じたまひてんや。いさゝかの所領、はらからと二ツ分けにして與へんとて、苦しき息の下より指圖なしたまふに、先づ中島てふ田と、河原てふ所の田を弟に附屬せんとありけるに、仙六、心に染まざりけん、父の仰せにそぶく。此日、父と仙六いさかひして事止みぬ。皆貪欲邪智諂曲に眼くらみて、かゝる敦圉は起るなりけり。いかなれば不レ顧二親養一任レ他五濁世一の人界、淺ましき事なりき。此夜は、別して脈悪しければ一人にては心細く、父の心に適はざる弟なれども、父に今はの時もいたらば、血を分けたる子の事にしあれば本意なくやあらんと、弟の心を思ひやりて、父の傍に寢させつゝ、灯の影に寢顔を振向けて、父の寢姿を守り居たりけるに、夜只苦しげに息を空へ向けて吐きたまふに見るも心いたましく、汐時のなをるを便りにしばらく安堵の思ひをなしぬ。

野尻の醫師の方にあるてふ熊膽を用ひて見たしとなんのたまふに、僅か一里の巷にしあれども、母はきのふ父と爭ひけることにしあれば、我れ求めに往なば看病も心もとなく、弟をやとひて遣はしけるに、折しも夜の五月雨晴れて、水は草の上越すありさまなるに、田の水の覺束なけれど父にかくし

て遣はしけるに、仙六はいづちへ行きてんと尋ねたまふに今はかくすべきよすがもなく、しか〳〵と答へはべりける。父は二なくいきまきたまひ、我に聽かずしてなじかは熊膽乞ひに走らせたるよ。汝まで我を蔑ろになすとて怒りたまふ。闇の方よりは父母のよき折柄と聲を勵まして、仙六に朝飯を食うべず往なせし一茶の骨盜人よ、弟の腹の空しき思ひ知らずやなど、あたりに人なきが如く罵るに、我身一つの苦しさ。今更すべき術もなく、頭を甓にすりつけ手をすりつゝ重ねては愼むべきと、涙を流して前非を悔るに、父の怒りも漸や靜になりき。生きみ、殺しみ、父の誡めは皆我身の幸にしあれば、なじかは惡しざまにうくべき。さるにても、父の怒りたまふ聲の細り、うたてきありさまなれ。よべは父の長の別れと思ひしに、今朝は父の折檻に遭ふことの嬉しさは、盲龜の浮木にあへりしもこれにはいかでまさるべき。かくて、日もほろ〳〵長けて弟ものろ〳〵と戻りけり。

五月一日。

空晴れわたりて麥の穗のいそがはしげに戰ぎ、百合も俄に紅白の色をあらはし、世の中は田植、早苗取とひしめきあへるに、常に健かなる父の起きもしたまはぬ御有樣、齒痒げに見へて、唯日永さに晝頃よりまだ日は暮ぬかと、かまけらるゝ（焦れる）に思ひはかりてあはれなりけり。

二日。

變起りていと苦しびたまふに、母は例のあらがひ（爭ひ）に見もし見向きもせず。弟は分地此かたは父の中よろしからず、如何に腹がはりなりとも斯く淺ましく挑み爭ふとは、所謂過去の敵としも思はれ侍る。父は一茶の夜の目も寢ざるをいとをしみたまひて、晝寢して疲れを補へ、出て氣晴らせ、などゝ和かき言葉をかけたまふにつけても、母は父へ衝りつれなく、父の一寸の歪みをとがめて、三從の戒めを忘れたり。これてふも母に疎まるゝおのれが枕元に附添ふゆゑに、母は父にまで憂目を見する事の本意なさやと思へども、かゝる有樣を見捨てゝ何地へかそぶきはつべき。

三日。晴。

迅碩は、おのれが匙にては藥も得屆かざる旨を告げたりけるに、今迄神佛とも賴みし醫師に、かく見放さるゝ上は、祕法佛力をかりて諸天應護のあはれみを乞はんと思へども、宗法なりとて許さず。たゞ手を空うして最期を待つより外はなかりけり。さてしも果てぬ事なれば、善光寺の醫師道有を招がまほしく、とみに人を走らせけり。未だ玉の緒の餘りも此の度は元の人に成りたまへと、醫師の來るをのみ待居たりけるに、日は入りはてゝ門々に灯す頃、漸や駕の見へければ、とみに病人を見せしむるに、迅碩がいへるがごとく、萬に一つも此世の人とは見へすとなんいはるゝ。今は賴むべき綱も

きれて、たゞ湯水の喉にかよふを力に夜の明るを待たりけり。

四日。

きのふに打變りて顏麗はしく何ぞ食べたきなどいはるゝに、嬉しさ限りなく、よべの藥のしるしに親のよみかへりたる心地して、カタクリなど練りて參らせけるに、椀に三ツ、四ツ、吸りこみたまふ。道有も此おもぶきにて變りの來らざれば、程なく快氣なるべしとなんいはるゝに、枕に附添ふおのれも、やゝ安堵の思ひをなしぬ。道有老かへりたまふに、古間の里迄見送り侍る。雨雲も西へ東へかたづきて、空の樣此上なうめづらしく、時鳥の初音折得顏に告げわたる。此鳥、疾くも鳴きつらんに、父の異例の日より、日は日すがら夜は夜すがら心を空にして事へはべれば、魂狂ふごとくにして聞きつるは今日始めての心ちなりき。

時鳥我も氣あひのよき日なり
涼めとの許しの出たり門の月

けふ田植日とて、ゆひしたる人（ゆひは互ひに仕事を助け合ふ事に云ふ）雇ひたる人、家にある人、一歳に一度のしつけ日なれば皆出拂ひて、枕元につきそふは我れひとりなり。日も壁にうすつき、飯時にもならんとする比、人の嫌ふ病なれば、閨に入れまゐらせけり。弟なるおのこいへるは『我父も

今死したらんにはよき往生なり』など語る。今より後にながらへば、生き過ると云はぬ許りなりき。親は二度と逢はるゝものにしもあらねば、假令百歳附添ひたりともあきたらまじきに、猛き虎も親は喰はず、人のにくむ烏も五十日親を養ひかへすとなん。況んや、人としてなでふ氣强くもかゝる事を語らふべきものかは。さるにても、なほ父のいたはしく灯火をかゝげて頭をもみ足をもみてまゐらする也。

五日。

藥相應したりければ、しば〳〵すゝめ參らせたく炭火煽きつゝ、心ちよげなる寐姿をつく〴〵守り奉るに、顏色うるはしく脈を伺ふに一ッとして不足なければ十ウに九ツは本腹ならめとよろこび侍りけり。末に思へば、快氣あれかしと思ふ慾目の見るところなりけり。

足もとへいつ來りしよ蝸牛

六日。

天晴れたれば、臥してばかりも退屈にやおぼしめさんと、夜着打疊みてよりかゝらせ申したりきに、越しかたの物語りなど始めたまひけり。そも〳〵汝は、三歳の時より母におくれ、漸や長くなるにつ

けても、後の母のなか睦しからず。日に〳〵魂をいため、夜〳〵に心火をもやして心やすき時はなかりき。ふと思ひけるやうは、一處にありなばいつ迄もかくありなん。一度故郷をはなしたらんには、將た慕はしき事もあるべきと、十四歳といふ春、遙々の江戸へはおもぶかせたりき。あはれ、餘所の親は今三歳四歳過ぎたらんには家を任せ、汝にも安堵させ、我等も行末を樂むべきに、年齒も行かぬ痩骨に荒奉公させ、つれなき親とも思ひつらめ。皆是れ過世の因縁とあきらめよや。ことしは我も二十四歳に身をなして、彼の地にて一と度び汝にめぐりあひ、相果つるとも汝が手をからんと思ひしに、たび遙々來りてかゝる看病こそ淺からざるゑにしなれ。此度は往生遂げたりとも何の悔みかあらんと、はら〳〵と泪を落したまふに、一茶はたゞ打伏して物も得言はず、夏の消えやらぬ富士の雪よりも厚く、紅のべにより深き父の恩を附添ふこともならで、徒だ浮める雲の如く、東にあるかと思へば西にさすらひ、光陰は坂の上に輪をころがすが如く、今年二十五年になりぬ。頭は白霜をいたゞくまで親の側を遠ざかりぬること、五逆罪といふとも是に過てんやと心に伏拜み、我れ泪を落しなば、病いよ〳〵重らせたまふべきと、顔押拭ひて打笑ひ、させること心に思ひたまはで、早く快氣なしたまへと、藥をすゝめける。やがて健かになりたまはゞ、我れ元の彌太郎となり、草かり、土掘りて心を安んじ、今迄の爲體許したまへといへば、父は限りなく悅びたまひき。

七日。晴。

仙六は、藥を乞に善光寺に行く。

夏の日の徒然におはしければ、何ぞ食うべたきと問ひまゐらせけれども、穀の類しか〴〵と好みたまはねば、梨一ツ參らせたくは思へども、みすゞ刈る信濃の不自由なる我里は、青葉隱れに雪のしろじろと殘るばかり、野もせ山もせ夏なほ寒き風の吹くのみなりき。

逸早く、梅賣る人の聲の門に聞ゆれば、青梅たうべたきと、むつかりたまへど毒なりとて許さず。あはれ何時の日か、毒斷ちのなき人にして見まほしく、掌の物とる如く心は矢竹に騷げども、うつら〳〵と頭重たげに見へたまふこと、あぢきなきありさまなりき。

八日。晴。

田休みなればとて、ゆかりあるも所縁なきも、聞きつたへ語り傳へて訪ひ來る人も多かりき。父が好むものなりとて、酒もて來るもあり、蕎麥粉もて訪ふもあり。父は悅ばしげに頭を擡げて手を合せ、ほど〳〵に會釋したまひき。身後黄金北斗にさゝゆとも、しかじ生前一杯の酒と、唐も大和も人の情等しく、亡き迹にて佛事供養美々しく盡したらんより、存命の和ぐ言葉にはまさらじ。今は世下りて、他の一寸の歪みは咎めて、おのれが一尺のひがみは見へず。よろづうしろめたきがちにて、我身不孝

なりと思へる人だにもなかりき。

うけかたき人と生れてなよ竹の
直なる道に入るよしもかな

此夜は、子の刻一ッの比より寢られねば夜長うおぼし、いまだ夜は明けぬか、雞は啼かざるかと我に聞きたまふこと三度び、四度び、七度び、九度びに及べど、只だ星明りのみして、軒の妻の樅、楓の木蔭そこかしこに暗く、梟の夜更けをうたふばかりなり。あはれ、雞の空音をつくりて關の戸を開けしためしはあれど、夜の朗かなるてふは、天のなせるわざにして、火を袋に入るゝ幻術は知らず、入日をかへす勢ひもあらねばたゞ燈火をかゝげて寢顏をまもるばかりなり。

九日。

十日。晴。

しきりにありの實をたうべたきとむつかりたまへば、此邊の所緣あるも無きも親しき限り、富みたる家、心あたりある門、聞きつくし尋ね探し盡すといへども、ありの實一ッ貯へたる人としもなく、夏さへ淋しき山國なりき。けふは藥の絶え間なれば、善光寺へ行かまほしく、曉に支度して門を出づる

に、皐月の空もほのゞ晴れて、白雪は太山にあるからに、青葉かくれの花は春を殘して種蒔の山人懷しく、時鳥の三聲、二聲も此上なく時得顏なるに、なじかは心晴れぬ曙なりけり。卯の下刻、牟禮てふ驛にいたるに、こは其昔み一茶江戸へおもぶける日、父の翁見送りたまひし里なりけるが、今は二十四年の昔なりき。河の音、坂の形もほのかに心覺えありて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顏のみとなりけり。

醫師の家に居ませる內にと、足をはやめければ、辰の刻許りに善光寺に着く。醫師は未だ朝飯こうほひと見へて、道有老の聲かしこに聞えければ、とみに病のさまを語りけるに、軈てかうがへの匙とりて御藥合はせて給はりけり。抑此地は、御佛の淨土にしあれば、肆は軒をあらそひ、幌は風に飜り、入る人、出る人、國々より遙々歩みを運びて、未來成佛を願はぬ人もなかりき。おのれは今日父の命をうけて御藥使ひ、將た梨を探しに來つるなれば、此役濟さゞらん內は、御佛も遙拜して、天を翔り地を潜りてなりとも梨一ッ得まほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店に足を空にして驅巡るに、悲しさは片割れ一ッありといふ人はなかりき。昔、雪中に筍を堀り氷上に魚を求めしためしもあるに、我れ梨一ッ得ること能はざるは、皇天我を捨てたまふや、佛神我を見限りたまふや、一世ばかりの不幸にはあらじ。父は嘸梨を待て居たまはん。此儘に歸りて、父を何と慰めんと思へば、胸せきふたがり、忍びおつる涙は大道をうるほし、往來の人の狂者と笑はんも耻かしく、しばらく手を組み、頭を

うなだれて心を鎭めける。此地に無きものいづちにかあらん。たゞ一足も早く戻りて、藥ばしすゝめんと、手を空しく吉田てふ里に來れるに、木立の山鴉三ツ、四ツ、二ツ、我を見ては聲立つるに何となく父の身の上の心にかゝり、息もつきあへず足を早めし程に、山の日影は八ツ時といふ比、宿に戻る。父はいつより顏麗はしく、笑ひをふくみたまふにも、梨を得ざることを語らば、又や氣色をそこなはん。兎やせん角やせんとためらふに、父の聞きたまへば、ありのまゝを答ふ。翌や高田へ參りて尋ね來りてまゐらすべしと、しら雲のよすがもなき根なし事をいひて父を宥め奉れるは、本意なき夕なりけらし。

十一日。

畠の雜役なりとて、人々は皆鎌提げ塊槌(くれつち)もて門を出れば、迹は父と差向ひなり。父は快う眠りたまへば、一茶は藥を煎じながらも、寢顏の蠅を追ひやりつゝ、病顏をまもりをるに、父はやがて行末の世の中の成行きを推量りたまひてのたまはく、我れ斯くなりつゝもつら〳〵成行きを思ふに、此家の者共、汝と我とを敵のやうに逆ひ、或ひは罵る。我命ながらうる中は我身にかへて汝をすくへばこそ、一日半時も家に居られめ。我が亡き迹にしもならば、いかで彼等に敵し難からん。日々夜々修羅の苦しみ絶えざらめ。其時、汝又我が遺言も顧みず他國せんは鏡の形を映すよりも明かなり。生きとし生

けるものゝ病難死苦は遁れ難し。汝、足なへ腰屈まりて古郷に戻りたらんには、家のうからやからは、さみつる事よ（それ見たことか）と、犬猫よりも淺ましく蔑み罵られたらんには、草葉の蔭にてもいかばかり悲しくやあらん悔くやあらんと、涙はら〳〵と落したまふに、一茶もきすい涙に打伏して、まこと親なればこそ、かゝる孤の不束なる身を憐みたまはめと、やゝ顏を上げて、かゝる事心にかけたまはで、此たびは我命にかへても快氣なさしめん。とみに快氣なしたまへ。御望み通り、我も妻迎へして御心のまゝに事へまつらんといへば、喜ばしき體に笑ひたまへり。晝になれば、野の人はら〳〵と内へ戻りけり。

十二日。

病人、水を好みたまふこと切りなるに、醫師の堅く戒めたれば、水を煮返して進めけるに、水ぬるしとてむづかりたまふほど、熱の苦しみさこそありつらめ。然れども、いかでか毒をすゝめ奉らるべき。醫師の申したりける事、つれなき事を申すものかなとて、只管(ひたすら)聞入れたまはず。かくて昨日まで諍はれし母は、毒をも顧みず、井水を天目(てんもく)に三ツ、四ツつゞけて强らるゝに、これこそ眞の清水なれ。今迄の水は似ものなり。いしくも一茶は我をたばかりけるかなとてむづかりたまふ。比干は紂王を諫めて胸を裂かれ、奸人周にはびこる時は、仁義施し難しとや、それより水を好みたまふこと、一日に

二升餘りになんありける。枕元に附添ひて、目前の非なる事みす〳〵諫むる事ならざるは是非もなきすゝむる人には嬉しげに笑ひ、藥を強ゐるものへは惡しざまに思ひたまふ。家内心を一ツにして父の本復を願はゞ、なじかは毒は進めらるべき。まゝならぬ世の中なりき。

十三日。

今朝は別して心よしとて、酒たうべたきといはるゝに、醫師のいかうとゞめたれば、一雫なりとも全快迄は進めまじと思ひしに、訪ひける人いはく、若し死なれたらんに、さまで好まれしをとゞめだてして後に悔るとも甲斐なからん。何にまれ、好まるゝものを多くはならずとも、一口、二口は進めてんこそ本意なれ。といはるゝに、隙を見て魔を入れんと思ふ人達、耳をそばたてゝ聞居たりしが、今朝は病人の好まるゝにまかせて、進めよ〳〵進めよやとて進めらるゝ。病人は、渡りに舟得しやうに日來の望み成りぬ顔して、飲まるゝ程に鯨の海を吸ふが如く、朝の間に五合許りかたぶけたまふ。二十日あまりも穀たうべたまはぬ病に、かくあら〳〵しき事をなすとは、三歳の兒に聞かすとも眉を潜むべきと、一茶ひとり手に汗を握るといへども、二人に敵し難く、遂に諫むるに難かりき。面には父をいたはると見へて、心には死をよろこぶ人達の致しざまこそ口惜けれ。

十四日。

かくて、今朝の顔見奉るに、きのふ無かりし顔のむくみこそ心得ね。またく酒毒の顔にのぼりたるべしと、つら〳〵五體をうかゞひみるに、むくみ又倍せり。酒毒を消す藥をもかなとおもへども、邊地今の間に合はず、兎やせん角やせんと思ふばかりなり。隱すものは見たく、留めさすものはたうべたきならひ、又酒ほしとなんのたまひげり。けふは心にそぶくとも堅く參らせじと爭ひけるに、むづかりたまふ氣色たゞならぬ聲にて、汝、醫師にはあらじ、何をか知らん。きのふ飲み〳〵て障りなきもの、何か苦しかるべき。延引せずとも早く出せと、むづかりたまふ。今は諫むるに言葉なく、然らば椀一ツと誓ひて參らすに、舌打して飲みたまふありさま、も一ツほしげなれども、是にて措きたまへと進めざりき。父の咽喉を干すやうに傍なる人はいへども、火をもて薪を熾んにするが如く、熱に酒もて病を增長さするよりはまさりぬべき。

十五日。

御顔の樣心にかゝれば、夜の明くるを待てうかゞひ奉るに、財帛のほとり聊か黑氣あらはれぬ。早く醫師にみせまほしう思へども、五里の道程にして、家内のもの承知せざれば、只一人もだゆるとも

蟷螂が斧を振るが如く、無益の論なれば空しく夜に入りぬ。そも〳〵牀就きたまふ日より朝夕の看經怠る時なくつとめたまふに、今は起きふしもまゝならず、牀にありながら灯火の影ほのかに稱名となへたまふ聲の、常に變りて聞ゆるこそ何となく心細けれ。早く日立ちたまふをのみ思へば、夜は夜として明け難く、日は日とて暮れ難く、晝は暮るゝをわび、夜は明くるを願ひけるが、漸く八聲の雞告げわたりければ、病人のよろこび、我も安堵なしぬ。

十六日。晴。

心に騷るは顏のむくみなり。さりながら、訪ふ人のあるが中に、ゑやみは二十日過ぎぬれば氣遣ひなし。かく日だちぬれば悉なし。心をたしかにいたはれと云へる人。又或人は、枕元に寄添ひ、往生の大事、忘れたまふなと、念佛を病人にすゝめ、おのれも高々と稱ふる人あり。たゞ人の淺ましさは、父の本復願ひなしと力を添ふる人は、詞の艶なからも嬉しく、往生を勸むる人は、誠かは知らねども恨めしく、聖(ひじり)の教へもとゞかざる里のならひながら、家内の輩(とやから)、弟を始めとして、父は今往生遂げられなば、よき世の仕舞ひなどゝ囁きあふ。一人として父の本復願ふものなし。只邪見驕慢の噺のみにして、むかし老ひたる姥を捨てけん遺風とも知られたり。

十七日。

日に〳〵顏のむくみ、又心にかゝる咽喉(のんど)の啖のところ〳〵となるのみなり。抑々始めよりいさゝか啖のしるしありしが、啖は砂糖にて押へ下して是迄は左程の事もなかりしが、今は凡人の力には覺束なしと、野尻の迅碩に消息飛ばして、今や遲しと待たりけるに、何のさはりありてや、其日は遂に來ずなりぬ。折しも皐月の短夜、毎夜明くるを待たざる夜はなかりけるに、今宵は別きて醫師の來ざれば明けがたき夜なりけり。かくて朝飯の頃は、いさゝか心やすげになりぬ。

十八日。

夜明ていさゝか心よくやおぼすらん、起てよりかゝらんとなんのたまふに、いと嬉しく例の如く夜着打重ぬれば、やゝしばらく靠れて居たまひけるが、息遑(いきづかひ)しくやありけん、又横になりたきとなんのたまふ。かくするうちに、迅碩來りて、とみに父の様をうかゞひていへらく『脈もよろしく、只むくみと啖一通りなれば、むくみを消す藥を與へやる』とて、匙とりて直に得さすれば、疾く煎じ進めけるに、相應やしけん、尿の度々下りけり。心すぐやかになりたまふらん、すや〳〵と眠りたまひけり。一茶は例の御足揉みて居たりけるに、父はふと目を覺しのたまはく、汝、此度は長く晝夜の介抱過分なり。深き父子の緣由(えにし)あればこそ斯かる時にをりあふならめ。必らず心勞なりなどゝ思ひてくれなよ

と、さめ〳〵とおぼすに、かく命またくありけるも皆親の恩にしあれば、十歳、二十歳、かゝる病におはすとも、親に對してなじかは拙き心ばへを持つべき。心靜に本復なしたまへといへば我も快氣とは思へど、一世の重病にあれば今も知れ難く、我れ往生ばし遂げなば、我が申通り、妻して此國を遠ざかる事勿れ　死後たりともそぶくなと仰すに、斯る有がたき御言葉、天神地祇も御上覽あれば、我心岩木にも、たとへ亡迹なりとも何かは變じ申すべき。必ずうしろやすく思召せと宥むれば、又すや〳〵と眠りたまひぬ。日もすか〳〵と夕となりたりき。夜も五更の比、善光寺に便りあれば、父は砂糖求めたきよしいはるゝに、氣色あしく起て、是迄の砂糖何程々々と價を數へたてゝ、又砂糖たうべる存寄りかと、死かゝる人に費(ひえ)となりぬればと、又彼是いさかひとはなりぬ。這は父の啖の藥にとゝのへたる砂糖を、父は我にたうべよと云はるゝ事もありければ、吾たうべると推察してかく罵らるゝか。いづれにもせよ、恐ろしき欲界なり。遂に砂糖は求めずなりぬ。此夜、子(わ)一ツの頃より大熱にして、冷水ほしとなんのたまふに、井に水を汲みに出でなんとすれば、父は童の如く思はるゝにや、父の仰せに、井に落るなとゝ教訓ありければ、母は寢て居たりけるが、それを聞きつけて、こなたの寶息子、然程(さほど)に迄やさしくせらるゝものかなと、忽ち嗔恚眼に角立て、髪の毛は針を立てたる如く逆立て、はたと睨めし眼(まな)ざし、むべ大蛇ともなるべきおもざしなり。

十九日。

今迄は、朝になれば心ちよげに笑ひなどしたまひしが、今朝は湯水も好みたまはず。かんばせの樣子も賴みと思ふ色艶はかなりけり。晝過ぎより病變じてもがきたまふこともなく此處を揉め　しこを叩けとのたまふこともなく、木の佛を横になしたるごとく、すや〳〵と眠りたまふばかりなり。或人の云ふ。ゑやみの神の退きたまへば、三日、四日ほどは、病人は物をたうべず寢ぬるものにあれば、あしき事には候はじと云はるゝに、早く快氣の事のみ願ふ心より、させるためしのありてふは稀にはあることなれば、父の命の未だ絶えずもあるは、幸ひ我も看病の本意を遂げたる心地してうしろやすくこそ思ひける。夜も五更とおぼしきころ、人々は皆寢靜まり、我も日來の疲れにしばしいねみ、いねずみ枕して、もの靜なる折からなるに、父はうるはしく目をあきたまひ、連れて歩めといはるゝ。いづくへばし行きたまふらんと問ひければ、いふにや及ぶ、至心々經欲生我國と、病なき時の聲の如く、高らかに稱へたまふ。心にかゝる事ばしのたまふものかなと、心におもへども囈語(うわごと)にやあるらんと、心を澄して居たりける。いざ、行かん〳〵と、頻にのたまへば、我も起すまねびをして、いざ行かん、いざ行かんと、四たび、七たび、九たび、いざ〳〵とばかりいへば、又すや〳〵と眠りたまひき。後におもへば、これぞ物ののたまひ終り、思へば辭世にてありしなり。

二十日。

熱は次第にさかんにして、朝は淡粉一つばかりもたうべたまひしが、晝頃より御顏の氣色青々と、目は半ばふさぎたまひ、物ばしのたまひたきやう唇動かしたまふばかり、出る息、引く息に、咳はころ〳〵と命を責め、是さへ次第に弱りたまひ、窓を射し入る日影も未の歩み近づく頃、人の俤も見分きたまはず、よろづ恃みすくなきありさまなり。あはれ、おのれ命にかへて、一たびは健かなる父にして見まほしく、食うゝたきとのたまふもあしかりなんと戒めしが、今は耆婆扁鵲が匙もとゞかざらん。諸天善神の力も及ばざらんと、たゞ念佛申すより外にたのみはなかりき。

寢姿の蠅追ふも今日が限り哉

かくて日も暮れぬれば、枕元の器の水に甲斐なき唇を濡しまゐらすばかりなり。

二十日の月は窓を照し、隣々は寢しづまりて、八聲の雞も遠く聞ゆる頃は、しきりに息の通ひも低うなり、始めより心にかゝる咳は、しば〳〵咽喉を塞ぐ。あはれ、とてもかなはざる玉の緒ならば、せめて咳をとりてまゐらせたく思へども、華陀（支那古代の名醫）にあらざれば妙なる術も更に知らず。今その時を待つのみの心のくるしび悲しびを、天神地祇もあはれみなく、夜はほがらかに明けかゝり、卯の上刻といへる頃、眠るが如く息たへさせたまへり。あはれ空しき屍にとりつき、夢ならば早くさめよかし。夢にせよ、現にせよ、闇に灯火失へる心ちして、世に頼みなきあけぼのなりけり。

無情の春の花は風に誘はれて散り、有界の秋の月は雲にともなつて隱る。況んや、生者必滅、會者定離の世のならひ、誰しも一度は行く道なれど、父の命のきのふ今日とは知らざりけるもおろかし。おとつい迄は、父と挑みあひ諍はれし人達も屍にとりつき、涙はら〳〵と流して、稱名の聲の曇りがちなるは、さしも偕老同穴の契りの未だ盡きせざりしとは、今こそ思ひ知られたり。

二十一日。

法師は、鹽崎てふ里にして、行程九里の巷なれば、葬は翌二十二日に定めたれども、緣由ある人は訪ひ集ひ、或は紙花を造りなどしてしばらく愁を避くるに似たりき。

日は片壁に横はり、夕を告ぐる山鴉は西山さして飛びかへり、無常の聲の入相は皆人々の上に響き、然らでも夕は悲しきに集れる人々さへ大方家へ歸りければ、常に見る灯の影さへも物足らぬやうに思はれて、是さへかなしびの數とはなりぬ。

今宵はまことの名殘とおもへば、父の屍に添寢して、香のけぶりの絶間なる時は、寢姿をつく〳〵なかめ奉るに、おとついの朝笑ひながら、越しかた行末の物語りありしが、今宵の今は空しき屍と變じたまふ。思へば、おとついが笑顏の逢め納めなりき。是まで惱みおはせる折りしも、朝はいさゝか快ければ、皐月の短夜も父は明くるを待兼たまひ、我も夜明の父の御顏見る嬉しさに、鐘をうらみ雞

を篤りて夜明けをのみ待ちたりしが、今宵の明け方が一世の別れ、翌日のかなしびは如何ならんと思へば、胸もふさがり魂つぶれて、人なき國にしあらば、誰憚らず聲を限りに泣くべきを、さらでも誰はゞからぬ紅涙は目に遮つてねぶられず。只、死顔をまもり居たりける。今まで長きと思ひし夜も、今夜ばすら〳〵と明けにけり。

二十二日。

近しき人は寄りつどひ、うれたき屍は棺に納めて、今は空しき俤さへ後の噂とはなりにけり。うたてき世のありさまなりき。あはれ、我は此家の惣領と生れながら、如何なる過世の所緣あればや、親に附添ひ事へ奉らん事かなはず。然りといへども、博突、遊戯を好み、親の財寶を損じたるにもあらざるに、前世に世を讒したる報ひに天より拙き性を下したまふにやあらん。一寸の孝を盡さんとすれば、直に一尺の魔のそねみに遭ひ、小鹿の角の束の間も家の治まる時しなかりき。父は我を一たび古郷を遠ざくるに若くはあらじと思はれけん。十四歳の春の曉、しほ〳〵家を出でし時、父は牟禮迄送りたまひ、毒なる物はたうべなよ、人にあしざまに思はれなよ。とみに歸りて健かなる顔を、再び我に見せよやとて、いとねもごろなる言の葉に、思はず泪浮みしが、未練の心ばし起りなば、連なる人に笑はれん、父に弱きを見せじと、無理に勇みて別れけり。しかしてよりこのかた、我は諸國わたら

ひを業として、東は松島、象潟の月にさすらひ、西は吉野、小初瀬の花に嘯き、念々不住猶ニ電光一、我も頭に霜をいたゞくまで、あるとある山々浦々を宿として日を送る境界、若し箒木のあるにもあらぬ山の奥に、むもれ木の道知らぬ里にしあらば、父の一期は夢にも知らじ、此度び不思議に巡り來て、病の始め終りまもるてふは、緣由の綱の未だ切れずやあらん、千早振諏訪の御神の引合せにやと、これのみ生前の面目なりき。

けふ申の刻ばかりに木々の村雨しばらく晴て、草の雫に夕日碓く頃、漸く鹽崎の導師來りたまひて、今は野送りの時とはなりぬ。父の因みの女どもは白き色てふ木綿を被ぎ、徑はいとゞ露けきに夏蟬の音をのみ鳴きて思ひを散らし、我は山吹のいはぬ色なるかなしび、隱さんとすれど泪はしのぶによすがなく、道も遠からねば、棺は草の高みに据ゑて、香を捻る手の力さへ夢幻のやうに覺えける。導師は、願以斯功德と共に棺は煙となりにけり。有爲轉變の有様なり。

二十三日。

曉、灰よせなりとて、おの〳〵卯木の箸折て仇し野に向ふ。今朝は、俤のけぶりさへ消えて、たゞ誠なるは松風の凄々として吹くのみなり。三月のゆふべは逢うて祝の盃を戴き、今朝の曉は別れ悲しき白骨を拾ふ。喜怒哀樂はあざなへる繩の如く、逢ふは別るゝ世の中今更驚くべき事にはあらねど、

今迄は父を頼みに古郷へは來つれ、今より後は誰を力にながらふべき。心を引かさるゝ妻子もなく、磨る墨の水の泡よりも淡く、風の前の塵よりも輕き身の境界なれど、たゞきれがたきは玉の緒なりき。

生殘る我にかゝるや草の露

蟲は人々寄りつどひ力を添ふ物語りなどに、しばし悲しびを忘るゝに似たり。夜は人々もおほかた戻りて灯火のあかきにつけても、病床の邊りのなつかしく、あからさまに寢たまひし父の目覺むるを待つ心ちして、惱みたまふ顏は目を離れず、呼びたまふ聲は耳の底に殘りて、まどろめば夢に見え、覺れば俤に立ち添ふ。

夜な〳〵にかまけられたる蚤蚊哉

行く水は再びかへらず。石の火は元の石にかへらず、八千度び悔ゆとも甲斐なき事にしあれど、賴みと思ふ緣由も皆枯果てゝ、知らぬ國に一人放たれし如く、便なき孤の一茶が心、只々哀れ心細く思はるゝのみなりき。

二十八日。

初七日なれば父のいまそかりける時、我に妻迎へして留めよと人にいひ、おのれにも誡められしが、ある人の中に聞かぬ振りに空耳したる人あり。殊に六欲兼備の輩、遺言を守らせなば顏赤らめあふことの本意なさに、又元の雲水となりて如何なる岩木のはざまにも身を潜め、風をいとひ雨を凌がんにもする墨の身一ッ、何んの耻かあるべき。しかあれど、いはで止みなんも亦父の仰せにそぶく。惡しき石ながらも打たねば火を生ぜず、破れたる鐘も敲けば響くは天地自然のことはりなり。否や、返事なきに、むげに國出せんも亡父の心にそぶくかと、しめ野分くる（一茶分家の件）を談じあひけるに、父の遺言守るとありければ、母家の人の指圖にまかせて其日はやみぬ。

父ありてあけぼの見たし靑田原

父終焉記　終

附

錄

一茶小傳

俳諧寺一茶。本名小林彌太郎。寶曆十三年五月五日。信濃國上水內郡柏原驛に出生。父は彌五兵衞と云ひ、農事の傍ら駄馬を業とする中流階級の百姓であつた。不幸、三歳にして母を喪ひ、祖母の手に養育されつゝあつたが、八歳にして繼母さつ女を迎へ、續いて異母弟仙六の出生に依つて、家庭は常に不和であつた。十四歳にして祖母とも死別し、同年江戸に上つた。其後數年間の消息は今猶明確を缺くが、出府の初志は何れへか奉公住の目的であつたものと推察される。然して、二十五歳當時は葛飾派の俳人二六庵竹阿に從つて圯橋と號して居た。後自ら俳諧寺一茶と名告り、西國行脚を志し、伊豫の栗田樗堂其他知名の俳人とも交遊した。江戸にあつては夏目成美の知遇を受け、直接彼の庇護に據ることが少くなかつたやうである。斯くして漸時全國的に異色ある俳風を認めらるゝに至つた。

享和元年一茶三十九歳の折、偶々歸省に際して父の發病に遇ひ、終始看護を盡して臨終の床に侍した。それより異母弟との間に遺產の爭ひを生じ、一茶は再び放浪の人となつた。この爭ひは實に十三年の長きに渡り、やうやく繼母異母弟等と圓滿の解決を見て、田地山林等を折半し、家屋も半分に仕

切つて異母弟の家族と隣合せて住むことになつたのは、文化十年、一茶既に五十一歳の時であつた。翌文化十一年、近村赤川村の常田氏菊女を娶り、同年十二月には江戸俳壇を退き全く故郷に隱遁するに至つた。菊女との間に續いて四男一女を擧げたが何れも夭折した。菊女も亦同棲十年目に、五番目の子供を殘して病歿した。間もなくその子も歿したので、六十一歳の一茶は再び孤獨裡に取殘されたのであつた。

翌年後妻雪女を迎へたが、相好からずして數旬にして離緣となつた。その翌年六十三歳にして第三番目の妻やを女を迎へた。然して其翌々年、卽ち終焉の年には火災に遇ひ、燒殘りの土藏に起居する間に、數年來の中風再發して終に不歸の客となつた。時に文政十年十一月十九日。享年六十五歳であつた。遺骸は小丸山の祖先の墓所に葬つた。來年(大正十五年)は恰もその百回忌に相當する。やを女の胎に宿して居た遺兒やた女に依つて、一茶の血統は今日まで引つがれて居る。

一茶小傳 終

一茶の鄕里へ

一茶の句の評釋を書くことについては、一月中から話が始つて居たのであつたが、H氏を介して書肆との間に具體的の交渉の進んだのは二月半ば頃であつた。

「いかゞです。二ケ月位でお書けになりませんか。」

其時H氏は云はれたのであつたが、前途の捕捉しがたいやうな仕事を控へて、然も人並はづれて遲筆の私には、大體の日數の見當もつかなかつた。事實、約三百五十枚の仕事は、私には可なり重荷であつた。

私は一茶について特殊の智識を持たなかつた。與へられた仕事に對しては、一句々々を自分の感情に任せて解して行くといふより外には何等の心の用意がなかつた。大體、私が俳諧の仕事に手を染めるといふことからして不思議であつた。然るべき因緣によるとでも云ひたいものであつた。私はこれまで決してこの方面に延びようとは思はなかつた。生解りながら俳味を愛したが、俳諧といふ圈內に卷込まれまいとする用意の方が强かつた。從つて私は俳諧については全く素人ないである。さればと

云つて、他に何等の智恵も素養もない私である。絶えず焦燥に駆られなから、どうすることも出來ず、若いいゝ日を一つところにジッと立練んで了つたやうな愚かな私である。

震災後特に暗い日が續いた。太陽が東から上つて西へ沈むことさへ懶く思はれるやうな日が續いた。今更ながら自分の無智や、貧しい天分の自覺に基く絶望が一つ。親しく覗いて見た文壇の空氣の意外の醜さを痛感したことが一つ。その上、私は既に小さな自分自身を書き現すといふだけの仕事に興味を失ひかけて居た。然も、私は何かしなければ居られなかつた。何等かの方法の下に仕事を持たずには居られない境遇でもあつた。さういふ私が、だら〳〵急に此處まで到着したのである。

評釋の仕事はむつかしい。殊に短詩形の俳句は解すべきものではない、各自が感ずべきものである。それは斯ういふ仕事に拘つて見ると泌々その感を深くするのである。然し、お互ひが先人の殘したさういふ仕事に依つて多少とも利益されて居るとすれば、これも滿更無意義な仕事とは思はれない。それだけ責任も重い譯である。たゞ然し、一茶の句に於ては、一讀瞭然として殆どその必要を認めないかのやうである。然も千態萬化と見せて實は一本調子の俳風を固執した彼の句の數多を評釋して行くといふことは、其處に言ひ知れぬ苦澁があつた。

然し、私はこの仕事には可なり熱を持つて居た。それで、四月いつぱいには本文だけ脱稿する意氣組で稿を急いだ。十枚……二十枚……三十枚……然し私は稿を繼ぐに連れて、自分の浮腰であることに

にハツキリ氣がついて來た。此處にも一茶が居る。彼處にも一茶が居る。一茶の顔なり姿なりがいろ〳〵に見え初めて來た。「これはいけない」と思つた。一體一茶の藝術は、一茶といふ酵母から醗酵し醸造された藝術ではなく、一茶そのものが味噌であり醤油であるやうな氣がする。その點が彼の藝術に於て人間味を云々される所以であるのであらう。一茶の場合に於ては、特に彼の生活を知り、彼の時代を知り、彼の性格を知ることに依つてのみ、彼の藝術は正しく理解さるべきであつた。このことは私の仕事に一頓挫を來した。

「あなたのやうな人間味のない人が……」

或日知人の一人はそれを云つて微笑した。それは輕い座談に過ぎなかつたが、その一言は私の胸にこたへた。事實私は七番日記の中に見るヘンな記號について意見を述べることの出來る資格も持たなかつた。私のやうな者が一茶の藝術について云々することが自體違つて居るのだ——それを思ふと、勢ひ憂鬱に陥らざるを得なかつた。私はいつか六七十枚に及んだ草稿を捨てゝ居た。

それ等の言葉は然し、一面に於てよい刺戟でもあつた。私は覺束ないながらも、自分で一茶といふ人を探したいと思つた。彼の郷里をも見たいと思つた。彼の郷里を訪ふことは、

我里はどう霞んでもいびつなり

その一句を解するだけにも必要であつた。「地勢は南北に長く」といふやうなことも、實際を見ずし

ては書けなかつた。

三月は過ぎた。四月に入つても一茶の郷里信州柏原は雪が深いといふ便りであつた。延び〳〵て、いよ〳〵出立したのは四月十六日であつた。歸りに善光寺詣をさせるために母と叔母を同行した。

よく晴れた朝であつた。珍しく旅に出る年寄達の眼をよろこばすやうに、芽出しの雜木林に透く青麥の果の武藏野の富士は、長いこと雪白な麗容を車窓に斷たなかつた。行く〳〵、飛鳥山の花、熊谷の花も、打續いた雨に色を失つて、最早今年の春も名殘少く見えた。

碓氷の險を越えて、荒凉たる淺間の麓、追分あたりに古驛の俤を見せて、列車は更に豐饒なる信濃の高原をひた走つた。長野驛で夥しい旅客の雜沓を見せてから、吉田豐野と過ぎて、牟禮に近づく頃から、今までの廣濶なる視野は急に狹つて、崎嶇たる山間を喘ぐやうに登り初めるのであつた。車窓の眺めは一變して、今雪の下から現れたばかりの潤ひた含んだ冬枯のまゝの山肌に、蕗の薹の綠ばかりが眼に泌むばかり鮮かに點綴して居る。山の窪には折々殘雪も見えて、山裾をめぐる雪解の濁流は滔々と屑を成して落下して居る。牟禮から更に二個の小隧道を過ぎて柏原に近づくのであつた。狹隘なる周圍から受ける感じは、總て暗く重苦しいものであつた。私は早くも一茶の性格の底に潛む發し切れない憤りのやうなものを、この郷土の地勢と關聯させて考へて見ずには居られなかつた。

然し柏原はよい所であつた。西に黑姫妙高飯綱の三山が雪に覆はれて、折から暮方近い日に燦然と

輝く威容を示して居る。雪を滑つて來る風は、頰に手先に薄ら寒かつた。驛より一二丁ならずして昔時の北國往還に出る。濡れたやうな綠の松の並木、往還の中央を貫く細流の淙に和して、今なほ三百年の夢を靜かに呼吸して居るやうな、眠れるやうな古驛の姿である。路次々々には未だ屋根雪が三四尺宛も積つて居る。然も、此處奥信濃の幽境にも現代の波は遠慮なく押寄せて居た。恰も明日村會議員の選擧日といふことで、此處の軒彼處の辻に夥しいポスターが張られてあつた。就中驚かされたことは、それ等のポスターの中に「候補者小林彌太郎君」の名を見たことである。(小林彌太郎は一茶の名で、現戸主たる一茶の曾孫が襲名して居る)それよりももつとまごついたことは、東京から紹介を貰つて行つた彌左衞門老が他行中と聞いたことであつた。私達三人は彌太郎君の選擧事務所になつて居る菓子屋の炬燵に入れて貰ひながら、一寸途方に暮れたのであつた。

やがて私は土地の人に案内されて、兎も角も彌太郎君の家を訪ねた。細長い宿(しゅく)の東側の家で、現在は豆腐屋であつた。候補者彌太郎君は恰度炬燵にあつて、私のために一茶の遺稿(三韓人の體裁に似るもの)を取出して見せて呉れた。細心と根氣そのものゝやうな眞蹟に接することは懷しかつた。七番日記も元この家に傳つて居たのを、先代とかゞ酒呑のために、七兩の形に取られて了つたのだとか云つて居た。彌太郎君との雜談に依つて、一茶が晝間も行燈をつけて煙草火に代用して居たといふやうな逸話も嘘ではなかつたことを知つた。一茶が六十二歳で娶つた後妻雪女を、僅三月足らずで「糸瓜

蔓切つてしまへは元の水」と、サラリと埒をあけて了つた話は有名であるが、彼女が新婚早々裏庭を掃除するために草を拐つて居ると、いきなりうしろから來て髻を掴んで引摺り倒して、草は拐らずとも枯れる時が來れば枯れると云つて怒つたさうな。そのことから恐れをなして雪女は逃歸つて了つたのだとか。いかにも一茶にありさうな話で、家庭に於ける一茶を非常に氣むつかしい人だらうと想像して居た私の推察を裏附けるものであつた。

往還に面した緣側に、くり〳〵肥つた子供が大勢居た。あれほど子煩惱であつた一茶は、あれほど不幸に次々子供を失つて了つたのにと思ふと、何かなし私は胸の固くなるのを覺えた。

一茶の舊宅地は、私を案内して呉れた隣家の松田某の所有となつて居た。ほちや〳〵と青み出た菜畑の中に、一茶終焉の土藏は寂しく立つて居た。土藏といふ言葉に嚴しい概念を伴ふ私達の眼には、それは土藏といふには餘りに見窄しい砂壁の納屋であつた。多難の生涯の果てに祝融子に見舞はれて家を失つた俳人一茶は、僅かに燒殘つたこの納屋の中に最後の息を引き取つたのであつた。

舊宅地總坪數二百十二坪（間口九間三尺五寸奥行二十三間）

東松露香氏の「俳諧寺一茶」に據ると、文政十年中村觀國が柏原宿の屋根改めの際の原圖の縮寫を示して、間口九間三尺五寸奥行二十三間の家を兩分して、一茶と一茶の異母弟とが住んで居たことになつて居る。各々の間口四間三尺二寸五分奥行二十三間、この蛇の寐床のやうな住居を私は非常に可

笑しく感じて居たのであつたが、實際について見ると、裏手の土藏所在地までを含む敷地の總坪數の間違ひであつた。

念のため彌左衞門老の留守宅を訪ふと、旅から書信があつて、私のために更に中村氏を紹介されてあつた。それで、その足で直ぐ、近年本陣から分家された中村氏を訪ふたのであつた。氏は壯年の人であつた。奥信濃まで來て出逢はふとは思ひ懸けなかつた程、明智のきらめく人であつた。その時まで、私は柏原に踏入つて以來、非常に言葉使ひに注意して居たのであつた。一茶さん一茶先生と崇める村人の中に交つて、それはどうしても口に出なかつたので、一茶翁といふ呼び方を倣つて居た。殊に彌太郎君の宅に於ては、私はおづ〳〵と口をきいて居た。それが中村氏に逢ふと五分間と經ない間にさうした遠慮は綺麗に消えて了つた。つか〳〵と物が云へた。氏は一茶の眞蹟も多く所藏して居られた。

稍々烈しい氣性の見える氏は、一茶の急所々々を指すやうな言葉を矢繼早に發せられるのであつたが、小一日搖られて來た汽車からポンと放り出されて、着早々すつかりまごつかされて了つた私は、其時鉛筆一本用意して居なかつた。それに菓子屋に殘して來たまゝの年寄達のことも氣にかゝるので、間もなく惜しい別れを告げた。

こんもりとした並木の松に、くすんだ家並に、からまるやうに暮色が迫つて居た。門前の殘雪が、

今炬燵の部屋を出たばかりの私の眼に刺すやうに鮮かに映じた。非常に氣が急いて居たので、私はいつか停車場の方へ出る道を見失つて、昔ながらの北國往還を北へ〳〵と進んだのであつた。人家が絶えて、それは〳〵淋しい道であつた。向ふから來かゝる眞綿を着たかみさんに尋ねると、「女衆一人で野尻へ行きなさるのかと思つた。」と、それを云つて、親切に小丸山（一茶の墓碑所在地）の北側まで送つて呉れた。

「この道を行きなさると山の下の廣い道に出ます。」

さう云はれて、私は泣きたいやうな思ひで、たゞ一人暮れ迫る木の間の固い積雪の道を辿つた。凸凹した足許の危うさに、身體中が氣味惡く火照つて來た。やうやく三人一緒になつて、兎も角驛前の旅宿に落着いたのは夜に入つてからであつた。

柏原の夜は寒かつた。そして、この日一日の身體と精神の過勞が私を頑固な不眠に導いた。時折、深夜の山の空氣を擘くやうに、驛の汽笛がけたゝましく鳴り響いた。とろ〳〵したのは曉近くなつてからであつた。

吐く息白い朝の寒さ。屋根々々の霜は薄雪したかと見るばかりであつた。靜かな村の選擧日和であつた。

遲い朝飯の濟んだ頃中村氏が來訪された。氏は餘儀ない今日の忙しさを控へながら、猶私のために

案内の勞を取られやうとするのであつた。何と生憎な日に來合せたことであらう。然し、雪解に增る野川に穏かな朝日が映えて、凍解けの田の面にはほのかな陽炎さへ眼につく。私達は一茶が孤々の聲を上げた一茶の生母の家二之倉指して行くのであつた。地勢は東南に展けて、薄露む信濃上州の山々に堺されて居る。あの山の麓が中野、彼處が一茶出京の砌り父親に見送られた道と、氏は一々指點して説明される。

「今歩いて居るのは新道です。あれが一茶時代の道です。」

楊柳生ふ小流れのうね〳〵に添ふ野道、それこそ少年一茶が生母の家戀しと、屢々往來した道なのである。背後に聳ゆる黒姫の麓路は、一茶が里の子と共に草刈つた跡と聞く。

私はいつかお伽噺を聞くやうな氣持になつて居た。元來研究といふやうなことに極く不向な性格に生れついた私は、ほか〳〵する朝日に溶かされて、魂が早春？の野づらに吸ひ込まれて行くやうな氣がした。そして、いつか旅行の目的も忘れて、透徹した理解の持主である新しい知己の前に、自分の心持を擴げて見せたい氣持で一杯になつて居た。

五十餘歳まで獨身であつた一茶の、殊に化政度を江戸に暮した頃の素行について、私は可なり注意深い眼で彼の作品を物色したつもりであつた。然し、それは實に用心深く緘默されてあつた。その間の消息をほのかに嗅ぎ寄れるものは、「身持よき夕や柳散り初むる」の一句か、比較的晩年の作と思は

れる「おもしろい夜は昔なり更衣」等に指を屈する外ない。貧しさや僻みや憤りを、あれほど露骨に告白して居る一茶が。

「それは自分に愧ぢて居たのでせう。性的には大分荒んで居たやうです。」

氏はそれを云つた。一茶と深い關係を持つ本陣としての氏の家に傳はる一茶に不利益な話や……野道に於ける氏と私との對話は、かなり峻烈な批判を極めて居た。だが、それは今明ら様に云ひたくない氣がする。一茶の佛教觀についても、餘り淺薄な批判を下したことを私は今愧ぢて居る。が、兎に角一茶ほど正直らしく見えて正直でなく、その癖彼自身を作品の中にさらけ出して居るやうな作家は少いやうに思はれる。それに、彼の作品に案外ローカルカラーの出て居ないことも、彼の鄕土を踏んで見て初めて分つたことであつた。

二之倉の庄家宮澤氏（一茶生母の家）の入口に、句佛上人の句を刻んだ美事な自然石の碑が立つて居る——迂濶な私はその句を忘れた——暖かい庭先に一頭の老馬が繫がれてあつて、恰度來合せて居た若い獸醫が、老馬の足と耳に針を刺して血を取つて居るのを見たことは珍しかつた。

この家に、一茶と異母弟仙六との十餘年に渡る遺產爭ひに鳧をつけた文化十年正月の熟談書。曆の裏面を利用した日記の斷片。及び書畫詩歌連俳圍碁將棋挿花集と題して、一茶當時明專寺に催された娯樂會？の主なる出席人名を刷物にしたものが保存されてあつた。沈山鵬齊一茶、並に一茶門下等の

名も見えて、奥信濃とは云へ、加州候參觀更替の折の宿營本陣所在地たる昔時の柏原の文化を物語るものであつた。

屋敷續きの畠中に一茶の胞衣を埋めた跡がある。この地方の習慣として、最初の子供は、必づ母親の實家に於て出產するものであるさうな。其處にも「一茶翁胞衣塚」と書した石碑が立つて居た。斯うして、砂壁の納屋に逝いた野人一茶は、鄕黨の誇となつて次第に神樣化されて行くのである。

二之倉からの歸途は、選擧に關して氏に懇談を願ふやうな人のために妨げられた。

町に出て、私達は小丸山に向つた。丘の麓に屯する選擧關係の人達の好奇的な視線に氣後れを感じながら、私は足の早い氏のあとに從つた。

一茶を紀念するために小丸山に建てられた小堂俳諧寺は、存外俗なものであつた。其處に安置されてある一茶の像が女性的に見えるのも道理、彼の門弟春甫の描いた畫像を參考として、血緣の老婆をモデルに使つたものであるさうな。虛子氏の書や松洲氏の畫が合天井に張られてあつた。

「此處へ變つた人が來たことがあるのですよ。岩野泡鳴が。」

それを云つて氏は蟠りなく笑つた。夏時は開放されてあるさうで、埃ぽい座敷の眞ン中に碁盤が一つ置放しになつて居た。

墓地は少しく東寄りの樹間の傾斜面にある。三百年の歷史を語る中村家の墓所を上段に、各家年代

順に下へ〳〵と墓が築かれてある。それに依ると一茶の家も相當古い方で、格式も悪い方ではないさうである。殘雪消ゆるところ、一基の墓碑の下に、一茶及び一茶の一族は靜かに眠つて居るのであつた。

墓參を濟まして、私は再び氏の家に招ぜられた。道すがらも、氏は私の仕事に參考となるであらう傳說等を語られる配慮を怠らなかつた。今は廢墟に等しい本陣跡も一見させて貰つた。

氏が所藏の遺墨並に氏の研究に依つて益せられたことは一二に止らない。一般に一茶が幼時の師若翁を悼む句とされて居る「この便り」及び「夕暮に」の二句の如き、眞蹟の短册に依つて明かに中村桂國を悼んだ句であることを知つたのである。然し、大體に於て氏と私とは餘りに意見を同じくした爲めに、私はよい氣になつて話し込んで了つたのであつた。忙しい氏に別れを告げたのは最早晝過ぎであつた。

旅宿に歸つた時に、私は柏原着以來初めて自分の身體になつたやうな氣がした。そこで初めて少しばかりのみやげ物を調へ、知己へ葉書も二三枚書いた。落着くと同時に、昨日からの氣疲れと不眠の疲れが一時に發して來るやうであつた。私は何となく重い氣分であつた。名物の蕎麥切も私には味がなかつた。

此處まで出かけて來た功果を充分に認めながら、扨て昨日からのことを思ひ廻ると、たゞ慌しく漠

然としたものであつた。一體私は一茶について何程のことを深め得たらう——煤けた天井の下に、ぬるくなつた炬燵にあたりながら、私は自分の散漫な頭を少し纏めて見ようとした。だが、結局無駄であつた。たゞ一茶の不幸な生涯——私は繼子一茶としての彼の境遇に徒らにセンチンメンタリズムな涙はそゝがないつもりである。彼の不幸が多く彼の性格から發して居るといふことは認めて居る。然し各々の性格から離れた幸とか不幸とか云ふものが、果してこの世に存在するものであらうか。

大石の下に生出た一莖の草のやうに、外的の運命と、內的の性格のために、壓せられ屈せられて、延びるに延び得なかつた力は、横に、蔓草のやうな執拗さを以つて地上に這擴がつた。然も、ソヨとの風にも縮み上るほど零細な感覺を以つて……彼の憤りは發せられなかつた。彼の愛情は汲まれなかつた。發せられざる憤り、汲まれざる愛情、悟られざる悟り……混沌とした彼の性格、彼の生涯が、人間的の痛みを以つて私の疲れた瞬裡をかけめぐるのであつた。私はいつか瞼のほの熱くなつて來るのを覺えた。柏原の午後の日は次第々々に傾いて行く。

さうして私は、空家のやうな宿屋の二階に四時何分かに出る長野行の汽車を待つのであつた。

うつゝなき春の炬燵のふとん縞　つゆ

終

一茶俳句新釋

定價金二圓三十錢

大正十五年一月五日印刷
大正十五年一月十日出版

著者　川島はるを

發行者　前田隆一
印刷者　東京市日本橋區元大工町一番地

發行所　東京市日本橋區元大工町一
振替東京三三一六番
振替長野三二六八番
紅玉堂書店

新釋和歌叢書の刊行!!!

萬葉集以後、何百何千となく世に出た歌集を一々讀破することは却々ひつかしい爲事であるばかりでなく、歌學研究者に非ざる限り殆ど無用に近い業である。さらばとて、其等の歌集に秘められて居る寶石にも譬へつべき名歌秀什を路傍の石の如く看過してしまふことは、二千年來の傳統を襲いで居る和歌に親しみを有つ人々にとつては、洵に甚大なる損失と言はねばならぬ。然もそれらの名歌秀什は、紛然雜然たる砂礫の間に微かな光芒を放つて居る寶石にも等しいものであるから、相當の鑑賞眼をもつに非ずんば、それが甄別に苦しむことは、多少とも歌集に親しんだ者の均しく經驗したところであらう。弊堂は茲に鑑みるところあり新歌壇の中堅作家數氏に囑して、個々の作家撰集を作り、その一首々々に就て、語義、大意乃至感味などと簡明に論評し、以てその作家の特色を闡明ならしめんとする企を試みた。實をいへば、此種の企は、疾うの昔に試みられねばならなかつたのである。歌を詠む人々の愈々多くして然も和歌二千年來の傳統に通曉する者甚だ勘なき今日、この叢書の出づること洵に偶然でない。この叢書出でて、多少なりとも新歌壇に貢献、猶るところあらば、弊堂の志は十分達せられたものと言ふべきである。ほ、本叢書は、一般に普及せしめたい希望の下に、裝幀を高雅瀟洒にし定價を出來るだけ廉價にした。弊堂の意の存するところを汲んで戴ければ幸ひである。

【定價各冊八十五錢送費六錢】

●紅玉堂刊行俳諧書●

半田良平著

芭蕉俳句新釋

定價三圓五十錢送費十二錢

著者は多年に亘る作歌上の體驗を基として、芭蕉の佳句秀句三百餘に就き語義大意を懇切叮嚀に解釋すると同時に、芭蕉の製作動機を考察し、更に進んで、その發想法や句の格調にまで心理的解剖を試み、以て芭蕉の句の藝術的價値を遺憾なく評隲して居る。

半田良平編

季題別年代付芭蕉俳句全集

定價三十五錢送費四錢

先生に編を乞うて、茲に最も廉價にして携帶に便なる「芭蕉俳句全集」を提供す。本書の特色は季題別により容易にその索むるところの句を探り得ると同時に、その句の製作年次をも知り得るところにあり。合計千二百句を收む。芭蕉に親まんとする人に本書を薦む。

勝峰晋風校訂及解說

芭蕉一葉集

定價三圓九十錢送費十四錢

今日以前の芭蕉研究は悉く一葉集から出發して居る。內容は芭蕉の發句、附合、紀行、文集、日記、書翰、句評、遺語の部に別つて全九冊に收め、編者が容易ならぬ苦心によつて大成されたものである。斯界の權威勝峰晋風氏の忠實なる校訂によつて、こゝに最も完備した一葉集の善本を公にする事を得た。

◇新釋和歌叢書第一期刊行書目◇

(1) 大隈言道歌集　既刊　半田良平
(2) 正岡子規歌集　既刊　橋田東聲
(3) 源實朝歌集　既刊　尾山篤二郎
(4) 香川景樹歌集　既刊　半田良平
(5) 良寛和尚歌集　既刊　相馬御風
(6) 柿本人麿歌集　既刊　宗不旱
(7) 橘曙覽歌集　植松壽樹
田安宗武歌集　松村英一
記紀歌集　花田比露思
加茂眞淵歌集　半田良平
新古今集　川田順
古今集　窪田空穗

◇新釋和歌叢書第二期刊行書目◇

萬葉女流歌人歌集　橋田東聲
紀貫之歌集　窪田空穗
大伴家持歌集　尾山篤二郎
明治天皇御製集　三井甲之
萬葉東歌及防人歌集　半田良平
愚庵和尚歌集　齋藤茂吉
西行法師歌集　松村英一
平賀元義歌集　植松壽樹
吉野朝庭歌集　半田良平
落合直文歌集　金子薫園
平安朝女歌人歌集　尾上柴舟
木下幸文歌集　松村英一

●紅王堂刊行歌學書●

石川啄木著

啄木歌集

定價一圓　送費六錢

啄木は新歌壇第二次の革命者也。彼は曾て短歌が歩まざりし大膽勇敢なる境地を開拓せり。即ち彼の纖細華麗なる情操を弄ぶを以て能事とせる長袖者流のヂレッタンチズムを蹴破して、自己の生活を歌ひ眞に短歌をしてその居る處に居らしめたり。

松村英一編

改選現代短歌用語辭典

定價一圓八十錢送費六錢

本書は古語新語を問はず、現代の短歌に用ひられたる語を成句にして三千句、單語にして約一萬語を集め、その意義を解明すると共に、一々實例歌を現代歌壇の大家の作に依つて示したれば、作歌に志す者の無二の良師友にして、歌壇恒久の經典たり。

半田良平著

短歌新考

定價二圓三十錢送費十錢

我が新歌壇の中堅作家にして、然も卓絕せる文藝批評家たる著者が、苦き歌作の體驗より生れたる歌論と、親しみ深き感想を集めたるものして、一面透徹せる歌道の新考察たると共に、他面作歌の眞諦を極めんとする者への深遠なる啓示である。

551
37

終